W.ASCN
1112
1:04
5:4+

Jan. 1899
no. 480

明治三十二年一月廿五日

女學雜誌

第四百八十號

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

第四百八十號目次

◎社說
晩き哉支那
(白柳の來遊を歡迎)
澁澤別莊記
同志社
李、合肥先生に一言す
出版法通過の慨歎
藩閥の窮阨に陷れり
◎女學
東西音樂比較の概略
家庭病理 下(和田醫學博士)
◎評論
當今の世を論す(八木[illegible])
◎大磯だより
初夢(中島俊子)
◎隨感
若山先生逝く
◎雜錄
巷頭の佳人(青柳有美)
子を思ふの愛(櫻井[illegible]村)
飯坂温泉に遊ぶ(仙台[illegible])
子試(前田)
世界御伽噺世界の婦人の話
◎時事
農工商の衛生(山形東根)
内地雜居と女子教育([illegible]村)

社告

一本誌は毎月二回即ち十日、二十五日の兩日を以て發行す
一十日發行の分は稍や平易實際の記事を專にし、第一、家庭の整理改善に益あるべき事項を主とし、其他、文藝、史傳、問答等の諸欄に重きを置き、二十五日發行の分は、女學宗教及び教育等に對する吾黨の卑見を陳述し、大に世上君子に問はんとするを旨とす。
一單に十日發行の分、又は廿五日發行の分のみを指定して所望せらるゝものあらば其の請めに應ずべし

●女學雜誌定價表●

前金	壹冊定價	拾錢
	半年分定價	壹圓
	一年分定價	貳圓
	(内國郵稅無)	
	代金は總て前金にて御注文ありたし。年來引續讀者にて前金切れの節は其旨御斷無之間は引續き發送す、よしも可有之事	
廣告料	一行(廿十字詰)一回	前金拾錢
	同 三回以上	一割引
	同 六回以上	二割引
送金	送金は東京駒込郵便支局に宛て小爲替にせられたし 郵便切手にて送らるゝ人は總べて一割増にて計算せられたし	

明治三十二年一月廿四日印刷
明治三十二年一月廿五日發行
發行兼編輯人 巖本善治
印刷人 布川孫市
東京府北豐島郡巣鴨村字庚申塚二百四十六番地
發行所 女學雜誌社
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所 株式會社秀英舍第一工場
(電話本局十九番)

社告

女學雜誌前金定價改正の事

女學雜誌前金定價は。上段の表、記載の如く相定め來り候處ろ。前金、後金、混雜いたし。受取計算の節、往々行違となり、御手數も尠からず。弊社に於ても、往々御氣の毒いたし候事、殘念の至に付。今後は、前金頂戴の節、上表記載の如く(一年二圓即ち一冊八錢三厘餘の割にて)計算いたし、後金は惣て、一冊十錢の割にて、計算可仕事に、一定候間。不惡思召被下度候。右御斷り申上度謹言

但し右新規則は來る三月より實行可仕に付。前金滯の御方は、二月中に御拂込被下、一時御清算被成下候はゞ仕合と存候

明治三十二年一月
女學雜誌社會計

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌

第四百八拾號

明治三十二年一月廿五日發兌

社説

英と魯と支那
白卿の來遊の歡迎

◎苟くも外來の珍客あらんとき、之を歡迎せざるもの丶あるべき筈なし。其説、其使命を歡迎すると否とは別問題とし、客其人を歡迎するは心得ある國民の禮儀であるが、君子の國たらんとを欲する日本などに於ては、尙更ら其タシナミのあるべき筈である。今や、ベレスフホード卿の來遊に際し、珍客として之を厚遇すべきは勿論、主として我國の商况を視察せんとすと云ふ其の所望に對しては、出來る丈け便利を供して其好都合を計るは當然の事である。但し、如何なる珍客にせよ、其説とする所を公言して、暗に我國民の贊否如何んを問わんとするに對しては、明白に所懷を陳して其の參考に供するが、又一つの禮儀である。即はち、彼が明白に問ふ如く此方も亦た明白に答ふるのが即はち歡迎の一つである。

◎一躰、魯士亞ほどの大國で、南方に一つの不凍港もないと云ふのは、不便、不利益極まるとであらう。現在の國勢から言へば、眞とに已むを得ざる形狀ではあるが、此の不利の國勢を嘲けり笑つて、事々に妨害し、其の自然の要求を必らず杜絶しようとするは、國家の大道に於て恥辱千万の事である又事實、夫が防ぎ切れるものでもあるまい。彼が之を得んとするに急にして、不都合の處置を爲すとあらば固より許すまじきであるが、未だ其事なき中に只一概に妨害して、決して彼に不凍港を得さすまいとするのも亦太はだ不都合である。然し彼は尙ほ突出的の所望であるが、此は卑怯の妨害で、大國民たるもの丶決して取るまじき處置である。日本などは、平生成るべく彼に港を貸してやるが宜しい。其の亂暴を防ぐには別に計畫もあらふ。夫を恐れて只だ近づけないように、

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

困らせるようにとして、夫で彼を防がうなどとは餘り感心の出來ぬ度胸である。

◎然し、魯士亞は存外の大計畫で、度々妨害せられ、度々困らせられても、夫でヤケにもならず、復讐もせず、諄々として節道を履み、漸次に南下の道の開けて行くようにする工合は中々のものである。支那に對しても、深く厚誼を盡して居ると見へる。彼が、支那國に對しての忠告は大國を開くには成るべく徐々となさるが善いと云ふ一點張りである相なが、皇太后や李鴻章は、夫に信を措いて、近年著ちるしく之と親しくなつたらしい。魯士亞の爲の不凍港は、最早事實に於て得られたよふなものであるから、之からの彼の進退は一層重厚になるであらふ、決して亂暴なとをする譯がない。何の爲に左樣な馬鹿なとをするか、殆んど利益のないとである。たゞ、魯士亞を一概に野蠻のよふに、大野心のあるよふに書き流した英文の書物に、妄りにカブレてはならぬことである。」

◎本年三四月の頃ろ、魯士亞の發起で、万國平和會議と云ふものが開かれる筈だが、其結果の行はれると否とは別問題とし、斯る大膽なる大問題を提出して、少しでも列國の注意を

引き得るものは、今の處只だ魯士亞である。况してや、先帝の時より、平和維持を近代の主義と爲し來りたる緣故に於て、克く始あり終あるの立案と言ふて宜しい。たとひ其の提出が行われぬとしても、彼は大道を主張して破れるので、既に機先を制して居る。一歩進んだ着眼着手である。

◎且つ密かに考ふるに、此の平和會議に於ては、支那の問題が出るであらうかと想像される。支那を分割させぬように、其の國家を維持させるのが、万國平和現在の大問題たるとを主張して、魯士亞より一案を提出するともありはせぬ乎。もし魯士亞にして、此の案を提出せば、英吉利は無論同意で、列國も亦無論賛成の事であらふ。一躰、支那を分割するなどと云ふとは、列國に人物なきよりして、トン〳〵拍子の調子から不得止行はれもするとで、列國が決して好んでするとではあるまい。支那問題は、貿易問題で、其の商業上の利益を得たいからして、列國が競爭するのである。夫には、支那の國家をあのまゝに維持するのが、列國の利益である。支那は之を所領する政府が損をするので、誰も好んで其の主權を取るべきではない。夫は、英吉利が、香港で、葡萄牙が澳門で十

分實驗して知つて居るとである。左すれは、列國に人物あらば、如何にもして支那の現狀を維持し、而して其の港は自由に開かせ、商品は天下に賣らせ買はせて、もつて大に貿易を盛んにしよふとするのが、肝腎の説に違いない。たゞ、魯士亞に掛念して、彼が分割の勢を止を得ざるに引起すとは無からうかと心配し、其の杞憂よりして色々暗鬼の飛躍もあるのである。故に、もし露士亞より支那維持説が出たらば、列國は大抵贊成して、万國平和の基礎が當分定まるに違いないのである。

◎本年三月の平和會議に於て此の案が出よふと出まいと、夫は別問題とし、もし列國人物の意志が行はれて、物事が順に行けば、是非とも此の正道に歸せねば成らぬとであらう。然し、今の處之に對して種々の杞憂がある所ろから、所々に二國とか、三國とかと云ふ同盟の出來るので、夫は本道に達する迄の小徑である。此時に當て、今亦、日米獨英の、四國同盟説が出て來たと思へは、左して新しく考へる迄もないとと思れる。』

◎凡そ、平生から、誰とは同盟はする、誰とは同盟はせぬなどと毛嫌いをするのは太はだ宜しくない。よし又、約束をして措ても、事實に曾へば大抵は役に立ぬものである。況してや、商業上の同盟は、取引の組合で、其外に同盟のあらう筈が無い。廣く品物を賣り、廣く愛嬌を買はんとする商賈に於て、最初から二三ヶ所と同盟をして、其他とは疏遠にするなどと云ふとは、譯の分らぬとである。

◎凡そ、事なき時は出來る丈け、ツキ合を廣くすると同時に、事ある時は、すべてが敵と云ふ腹で、其の用意をして置くのが、人にせよ、國にせよ、當然の覺悟であらう。日本などは、後進國で、之から世界に出る少年である。毛嫌ひなどをしては勿論成らんが、又、誰をも頼みにしても成らぬ。腹は大きくして、用心は固くせねば成らぬ。夫で、國に人物が出來、富が增して來れば、世界中が寄つてたかつてお世辭も言はうし、ひいきにもしよふが、人もなく、富もなく、國家に實地の力がなければ、如何に信切な外國があつても、之と情死をしてくれる氣遣ひはあるまい。誰とも同盟をするが宜しい、又誰をも頼まぬが宜しい、誰をも頼まぬから、誰をも疎んずる必要がない。國と云ひ、個人と云ひ、別に變つた道のある筈は決して無いと信じて居る。

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

臺灣別莊論

◎臺灣は別莊の如くせよ、之に餘り熱注す可らずとは、數年前より屢ば吾人の主張したる所ろなるが、當時一代の輿論は無論之を冷笑するのみにてありき。其後、敏腕家の總督、敏腕家の長官を歡迎して一世狂する斗りなりしが、別莊の氣長き仕事に敏腕家を任ずるは他日の悔を遺すに過ぎずと主張したるに、之も亦た冷笑を買ふの外なかりき。然るに爾來、世論一轉し、人心內政に切迫し、亦た臺灣を顧みるの暇なかりき。敏腕急激の才子をして、少しく思を寛ふして事功を遠大にするの餘裕あらしめたるは、只だ此の時勢の賜物なりしに、土匪招降の一鑿端なく破綻を生じ、輿論再たび南方に向ひ、將に彼の才子をして大に陳辯に忙はしからしめんとす。之れ抑そも、吉兆か、はた惡徵か。

◎今亦た臺灣起業公債募集の計畫あり。之を以て田制を一定し、鐵道を敷き、港灣に築かんとすと云ふ。其事頗ぶる經綸に類し、人の大率ね快とする所ろなるが如し。然れども、吾人の眼を以てしては、之れ本住の安穩未だ熟せず家計頗ぶる困難の時に際して、盛んに別莊の普請を起し、而も之が爲に大いに借金せんとするの計畫なり。心あるもの、決して贊成せざる所ろならん。

◎臺灣の識者夙に冷嘲し、日本人を見ると茶番狂言の如し。維新以後の經驗三十年。更に一度び朝鮮に於ても經驗せり。今少しくは別格の遣り口もあるべきならずや。年々續々として同一の筆法、而して事々同一の失敗を繰返さんとするに過ぎず。對岸の廈門の隆盛は、必らずしも鐵道と港灣とに由らざるを見んなり。今ま一擧して、臺灣に過度なる整理と發達とを求めんとするに、其功よく其費に及ぶべき乎。何んぞ前鑑に省りみて、將來に大觀せざる。

同志社

西京同志社の事、近時遂に破裂せんとし、社員は慨然として一同辭職したりと云ふ。

其の衝突の由來を聞くに、同志社憲法の改正に於て端を開き

寄附金取還の起訴に於て遂に今回の辭職ありと云へり。

社員諸君は、其の見る所の信念によりて憲法を改正したり。而して、其の事實に於て共力者たり。名に於て寄附者たる外國傳道會社は之を不可としたり。之れ其の見る所の異なりし也。此の故に、一は其の囘復を要め、他は之を否なみたり。即はち到底相合はざるもの也。

社員既に袂を連ねて辭せり。新社員の如何なる方針に出んかは未だ之を知らずと雖ども、抑そも同志社の如きは、内外共力の事實を表明する最大の標本なり。もし能ふべくんば其の共力の美を成就すべし。不幸にして若し能ふ可らずとせば、何故に、其の資本を當然の割に於て相分ち、單純に相分離せざるなる乎。

宛がら夫婦の如し。其の久しからんとは何人か之を望むと雖ども、其の別れざる可らざるの日に於ては、持參金を還附して、奇麗に相分るゝを丈夫の事とす。妻の財産は夫の名に歸し、別に其の主權あらざりし時代の結合と云ふと雖ども、今にしては之を還附するを當然とし、又男子らしきとゝす。惟ふに、此外に何等複雜の理由あるかを知らず。

李、春畝先生に一言す

近頃ろ李經芳が語れる所のものに就て聞く。春畝先生の支那に入るや、意氣揚々たり。宮中亦た先生を引いて顧問大臣とせんとす。時に李小筌一日、先生を訪ひて靜かに云く、

吾等今ま御同樣非役の身なれば、政談は避くべし。然し乍ら只だ一事を告げ置く。曩に余の命ぜられて下の關に使ひし、閣下と見るの日や、閣下過大の償金を要求せらる。時に余、閣下に告げて曰く、斯の如く過大の償金は、支那を苦しむる非常なるのみならず、併せて必ず貴國の利益にあらず、支那は之より外國干渉の端緒を開かん、抑そも貴國に亦た何の利益かあると。然るに、當時閣下一言否斥して曰く、余は陛下の命を奉ずるのみと。今ま試みに閣下に問ふ、此の過大の償金は果して何等の結果を兩國の上に生起せしか、

春畝先生の之に如何なる答辯を與へられしかを知らず、但だ吾人は頗ぶる忸怩たらざるを得ざるものあるを感ず。春畝先生は我國の政治家なれば也。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

増税案通過の祝杯

今にして復た増税非増税の可否を言ふの暇なし。但だ是れ政海は一時の波瀾なれば也。然れども、事の人情に關し、義の臣節に渉るものに就いては、遇ふて茲に一番の警醒を要めざるを得ざる也。夫れ、たとひ増税を切要とし、之を地租に取るの悲しきを斷行せざる可らざるとも、凡そ事の止むを得ざる者は痛然として忍び、泣て稍く之を斷るの情義てそあるべけんに、此案の通過を賀して、祝杯を擧げ、國務大臣萬歳の喚呼を受け、則はち陶然として醉ふて初めて春色ありと云ふに至ては何事ぞや。而して公然此等の記事を掲載して得意の状を爲すに至ては、文士の情感も亦た冷えたりと云ふべし。

藩閥の感慨に去れり

若し其人を列擧せば、今の内閣の如く藩閥出身の人多きは近時稀れなん。而して、藩閥の感慨に去つて民心既に之を忘れたる如きは、何の故ぞと問へ。時勢の變遷も亦た太甚しきにあらずや。

女學

東西音樂比較の問答

某なるもの、調子と拍子との別より起して、次に問て曰く、日本の音樂は、どふも簡短で、單調子で、甚はだ整わん所ろがあるよふに思われます。琴などは十三本も糸があり乍ら、其調の區域は至つて狹いよふです。迚も西洋樂には及ばないかと思はれますが、如何です。

答て曰く、

樂器と樂器との比較は別の事として、大體、西樂と東樂との本色が能く分らぬ所ろから、屢は左樣な疑問を起す人がある。更に言わば、音樂には限らん、宗教にせよ、文學にせよ、政治にせよ、総べて西洋風と云ふものと、東洋風と云ふものとの大體の差別がある。今では、西洋風と云ふが流行して居るから、之に反くものが馬鹿のやうにも、幼稚のやうにも見へるので、夫はハヤリに外れて居ると云ふか

らの事で、一躰、進歩して居らぬと云ふ譯では無い。趣味にも、根本の趣味と、流行の趣味とがある。大低の人は流行の趣味にかぶれるものだから、此の流行に違つて居るものゝ味わひを見とめないので、實は其人が幼稚なのである。東洋風にも西洋風にも夫々特色があるが、その特色を知らないで、只だ一方の美許りが美だと思ふのは、上戸が下戸を非るようなものだ。

問　其の西洋風、東洋風と云ふのは、如何な相違であります乎。

答　精かく言へば色々あるが、先づ其大躰を言ふと、西洋風は解剖的で、東洋風は綜合的です。そうなつた理由があるのですが、先づ兎に角、左様だ。夫故、西洋での趣味も亦た解剖的で之を別ち、之を分ち、復雜に復雜を重ねて、而して其内に調和を作つて樂しんで居るが、東洋の趣味は綜合的である。異を合せ、別を合せ、之を同化し、之を妙和し、所云ゆる同觀平觀の上から調和を作つて樂しんで居る。夫故、文學にしても、一つの文字を色々に使ふ事を樂しんで居るが、西洋ならば、一々別に作つて仕舞ふ。作らなければ字義を確定して仕舞ふ。宗教でも、政治でも皆な其の趣きがある。ソコデ音樂にしても、色々の樂器を合せて合奏したり、色々の聲音を整へて、コーラスを作つたりして樂しんで居るが、東洋風は寧ろ反對だ。一つの樂器を用ゐて種々の音を出させ、一つの音を出させて、種々に響かせ、一つに響かせて種々に味わせ、一つに味わせる中に種々に連想せしむると云ふやうに、一見すれば何の變化もなく、何の波瀾もなきが如き中に、非常の波瀾變化を認めしむるやうにして居る。其處が苦心の存する所ろだ。夫故、東樂は靜中に動を求め、西樂は、動中に靜を求める。東樂は簡短の中に復雜を生じ、西樂は復雜の中に簡短を求める。ソコデ、もし其の未熟なるものに就て言へば、東樂の未熟なものは、面白くなく、西樂の未熟なるものは騷々しからん。一は眠くなる、他は馬鹿らしくなる。夫は樂の未熟なものに付て言ふのであるが、聞手の未熟なるものが感ずる感じ方も亦た左様な風に違つて來る。ソコデ、東洋の音樂を聞て、只だ一概に單調子だなどと云ふ人は、其の單調子の中に復雜を能く聞分けんからの事で、實は其の聞手の未熟なるを現はすのである。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

問　左らば、先づ、どちらが善いのでせうか。

答　そふ問ふのが幼稚と云ふもので、譯が分らんからだ。どちらも夫々の特色で、決して優劣を言ふべきでない、優劣は其人物と、伎倆とにあるのだ。東樂に達したものと、西樂に達したものとは、東西の大關に爲て置べきで、決して何れを下に置くと云ふ筈のものでない。器量の整つて居る居らぬなどは比較すべきでない、皆な其人々に適したのが整つて居ると云ふて好いのだ。大刀を揮ふものもあり、小劍に得手なものもあり、棒を使ふものもあり、竹へらを用うるものもあり、拳骨を第一にするものもある。皆な夫々の人に取つての第一の器械だ。器械の善惡を比較すると云ふのも馬鹿らしいのだが、其の比較によつて東西音樂の違ひの点を考へようとするなどは、譯の分らぬ人のすることだ。一體、今日は西洋の方が時勢に適つて居るのだ、夫で勢力が善いのだ。手短かく言つて見ると、西洋屋と、日本屋と、支那屋と、天竺屋と云ふように、夫々商人がおるが、今では、西洋屋の方が流行に乗つて居るので、其の家の人の趣味か流行し、其家の家風か流行すると云ふ丈けのとで、言はば、人生の變化で、一時の巡り合せと云ふものだ。流行に逆らふのも馬鹿なとで、聖人は能く世と推し移ると云ふほどだが、其の流行なる所以を勘辨して居らぬと、土臺から馬鹿になつて仕舞ひますぞ。

問　夫では、西洋風と云ふのが一番善いとは言はれないのですか、アレが文明開化の上等なのではありませんか。

答　夫れが迷つて居ると云ふものだ。ナゼ、あれが文明だと云ふとを考へて御覽ナサイ、直に分りませう。何も文明らしくないではありませんか。第一、自分で文明だ〳〵と言つて居るではありませんか、夫で直きに分つて仕舞ひませう。人が已に聖人だ〳〵と言つて居れば、成程聖人だと承知しますか。自分で言つてる丈けか旣に馬鹿氣たる所ろを示すのです。昔しは、アフリカの中から第一等の文明が出ました、印度や、埃及から出ました。夫が、又、衰ろへて、今では西洋の方に氣運が巡つたのだが、今度はソロ〳〵支那や露西亞の方に向つて來ようとして居るのです。早い話しが、當世の紳士紳商と云ふものを御覽ナサイ。皆な成り上りもので、十年二十年の前迄は、天秤棒一本をかつぐか、草履一足をつかんで居つたものでせう。夫か氣運に乗つて出世した所ろが、昔しの

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

大家舊家は、餘り自分で高尚ぶつて、ヤレ雅致だとか、品だとか、文明だとか言つてをるうちに衰ろへて仕舞つて、今では、昔しのソノ草履取の爲に琴を引く位ゐのものでせう。世界の列國も此の通りです。一時時めいた舊國名國が追々と衰ろへて、其頃ろ下郎扱にされた國が代つて紳士紳商となつたのですが、成り上りで、うれしいものですから、切りに立派の衣物を着たり、奢つたり、自分で開化だなどと言つて今では威張つて居るのです。所ろが、奢りが高じ、生計が上つて來て、自分の國の商賣丈けでは食へなくなつて來たから、ソコデ支那と云ふ大きな商賣國に目をつけ出した。又、久しく野蠻々々と云はれて、辛棒計りして居た露士亞が、コツクなつて來た。藤原氏が、源平の蠻勇を恐れるやうなものでせう。ツマリ、世界の列國は、十二三軒のおツキ合で、十二三種の家柄だと思つて考へて見ると、直きに分りませう。

問　左樣しますと、東洋の音樂と、西洋の音樂と、夫々、善い所ろがあるとして、其の調和と云ふものには、骨を折らないでいゝのですか。

答　調和しやうとしたからとて、急に出來るものではないが、

自然に調和して仕舞ふのです。日本の特有物産が西洋に輸出になり、西洋の特有物産が日本に輸入しませう。交際が出來て、スクものが出來さへすれば、商人が自然に持つて來たり、持つて行つたりして、其間に交はりが出來ませう。音樂でも、其通りです、今では大抵の人が只一概に西洋樂と言つてませう、之は西洋料理と云ふよふなもので、其中に、佛蘭西料理、英吉利料理、獨逸料理と云ふ別のあるのを未だ知らないからです。然し、西洋樂にも、夫々、西洋各國の音樂の風があつて、初めは矢張り別々でした、東樂と西樂との相違ほどに遠い距離は無いとしても、兎に角、距離があつたのですが、其の各國人の交際が密で、互ひに趣味を知り合つて、夫々お互ひのスキナものを此方でも好くと云ふよふになつたのです。ソコデ、引くるめて一の西洋樂と云ふようなものも少しは調和して出來たのです。東樂と西樂との關係は矢張り左樣です。日本人が追々西樂を好むようになり、西洋人も追々日本樂を好くようにもなつて、其上で、自然の結果として調和したものも出來るでせう。然し夫はマダ〳〵前途遙かのちであるが、日本人、西洋人、互ひに其の趣味を解し合つて、双

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

方夫々のスキなものをお互いに味はい得るようになるものが、先づ第一着手の調和と云ふものです。

問　成程、分りました。然し今では東洋風と云ふもの丶調和を得て居る人がありますか。

答　達人は皆な世界的のものです、人物の心の中には、凡人の心で調和しがたいもの迄が調和して居ます。無理に混雑して容れて置くのではない、生命となつて調和して居るのです。ツマリ、其の調和の區域が廣いほど、人物が大きいとでも言ふのでせう。東洋風、西洋風は帶の兩端で、反對の方に行くよふですが、ツマリは結び合ひます。今では、之を反對だから、調和しがたいものだと思つて居るのでせうか、夫は狹隘です。どうせ、東洋風、西洋風、皆な片よつてます。つまり、風とか、派とか云ふものは、一部分の眞理です、皆な合せられて仕舞わねばならんです。音樂などは、マダ美術だから左程にも無いが、宗教とか、教育とか云ふものになると、人の固まるよふが甚はだしいです。凡て、派の違つたものは、悪魔のように思つて居ます。耶蘇教などは、東洋から起つたもので、夫から西洋に這入つて、また東洋に來かかつて居るので、世界的のものですが、大抵の人は、之を西洋風に引りしたがるし、コチラでは又東洋風でないものだと言つて防がふとして居る。丁度お互いの見識の度合が似て居ます。僕などは、平生、人の熱血をもつて骨を折つたものには皆な眞理があり、美があり、妙所があるものだと、先づ極めて、之を研究して見ようと云ふ心持で居ます。分らなければ、マダ己には分らないのだと、斯ふ自分で戒しめて考へて居ます。自分の流義に合せて他を推量ることを爲ないようにと勉めて居ます。ダカラ、日本の音樂でも、古來幾多の人物が、一生を棒に振つて其の妙を樂しんで居つたと云ふことから考へて見て、餘程面白いことがあるに相違ないと、初から尊敬して掛ります。今の年若い批評家などが三年や五年の研究で何と言わふとも、僕は古人の一生涯の研究の方に先づ重きを措いて、ウカと今の批評にはかぶれません。只だ仔細に考へて研究して、自分が未だ未熟なのではないか〳〵と省りみて居ます。アナタのような音樂專門の人は尙更の筈で、自分が西樂を專門にするからと言つて東樂を輕蔑してはなりません。ソウスルト、御自分が西樂を見ることとの淺薄なことが直きに分

ります。自分で苦心するものは、人の苦心を貶とむもので、他人に亦を夫れがあらふと推察して、容易に、人を馬鹿にはせぬものです。

家族病理（下）

社會醫學生 某

第三、家族分散病

定義。凡て家族は夫婦ありて成立す。故に夫婦の分離する、やがて是れ家族の分散なり、家族分散病とは則ち夫婦の分離するとにして、俗の所謂離縁なり。

解剖。此病には、四種別あるが如し（一）夫が強いて妻を去るもの（二）妻が自ら求めて去るもの（三）舅姑又は親戚の輩が夫妻の間を強いて分裂するもの（四）種々の事情起りて双方協議の上相離るゝ者則ち是なり。夫の強いて妻を去る中には夫が放蕩遊樂を始め、妻よりも美目よき女に狂迷し、之を我庭に植えて眺めんものとの意思を起せる時と、曾て一目打見たる姿と心とは相反して、種々の欠點漸く知れ渡り、之を妻とし暮さんと心苦しく觀念せる時との二種あり、前者は夫の無情極まるもの、後者は親しく相手の心事を知了せざる輕忽に基くものなり。妻の自ら求めて去る中には、夫の場合と均しく、婚嫁前に於て能く夫の心事氣象の如何を知得せず、一旦嫁して後ち幾多の性癖、氣象を知り、將來永住に堪へざるを悟りて去ると、舅姑と氣相合はず、假令自らは夫を慕はしく感ずるも舅姑の虐待に堪へやられで去るものと、又夫の放蕩遊樂に困じ、或は自己の放埒にして他に契を結びしとより來るものあり。其舅姑が強いて分離せしむるは無慘の極にして、相當の事情ありて協議せる以上のものは、止むを得ざるもあれど、凡て其病たるに至りては一なり。

症候。此病氣は都會に於て最も流行す、東京大阪の如き婚姻三あれば離縁一ある比例にして、三軒あれば一軒は必ず此病に罹るものなり。女は一旦婚嫁すれば已に處女に非ず、而かも如何なる人たりとも婚嫁の當時に於て得たる所の最初の快樂は終生忘るゝ能はさる所、離縁の後ち再婚するは已に處女の身にあらざれば、其感ずる所、以前と比すべからず、故に此病に罹れるものを見るに、何人も好んで快しとせず、又假令強いて去ると雖も、前夫と共棲せる當時の感情屢々發起し

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

て心地よきものに非ず、而して舅姑又は親類が強て分離せしめたるものには、夫は憂鬱症となりて之を慰むるに放蕩を始め、妻は夫を慕ふも相逢ふとを得ざれば投身する如きあり、又は夫其實家を捨て離されたる妻と共に逃走して別居し、爲に父母の困難する等の合併症を發するとあり。若し夫れ子女産出後に於て此病に罹らんか、後妻は子女に對する繼母なれば、兩者間紛擾交々至り、或は嫡子を廢するの奸計をなし、或は繼母疎んずるの不孝となり、一家の親睦爲めに紊亂として破る、爲まじきは離縁なる哉。

●豫後。豫後は甚だ不良、其夫の一旦妻を去りたる後ち、又他の仇し女に飽き、依然前妻の優れりしを悟る如く男性には往々雜駁の感を爲すものあれば、回復し易きものあり、然れども妻の自ら求めて去りたるものは回復し難し、是女性の緻密にして、忍耐強く、容易に去就を敢てせざるものなればなり。夫妻親睦せるも舅姑又は親族の強て分裂せしめたるものは、其舅姑又は親族をして正に就かしむれば直ちに回復するとを得べく、事情ありて協議上に出でたる者は亦その事情の消滅によりて回復し得べし。然れども經過の程度によりて回復の期に遲速あるは明なり。要するに速かに回復せざれば、一方には後妻を娶るあり、他方には再婚するあり、事此に至れば、一家分散の結果其の分散せる元素が、別個に他者と家族を組成したるものにて又如何ともすべからず。而して再婚は已に處女の身に非れば、往々にして已に子女あり、又は老年者、或は一癖ある者を夫とせざるを得ざるの不幸を生ずべし。

●治療。之を治療するの法は、一にして足らず、能く其由來する所を察して應病與藥すべきもの也。先づ第一は家族組織に關する嚴密の教訓を布くと、第二は此病に犯されしものは自家已に不健全なるのみならず、社會一般の風俗上に惡疾を流行せしむるとを悟らしめ、社會の制裁を嚴にするとなり、第三は法律上の規定を要す、左に現行民法の親族篇中、之に關する規定の要領を掲げて參考に供す。

昨年七月發布されたる新民法に於ては、夫婦は協議を以て離婚を爲すとを得と規定し、而して他方には裁判上の離婚を規定したり、則ち夫婦が其協議を以てしても、離婚の成らざる場合に於て裁判所に請求して之を成すとを得るものなり。之によれば、其の場合に限り夫婦の一方が離婚の訴を提起するを得るなり。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

一　配偶者が重婚を爲したる時、
二　妻が姦通を爲したる時、
三　夫が姦淫罪に因りて刑に處せられたる時、
四　配偶者が僞造、賄賂、猥褻、竊盜、强盜、詐僞取財、受寄財物費消、贓物に關する罪、若くは刑法百七十五條、二百六十條に揭けたる罪にして輕罪以上の刑に處せられ、又は其他の罪によりて重禁錮三年以上の刑に處せられたる時、
五　配偶者より同居に堪へさる虐待又は重大なる侮辱を受けたる時、
六　配偶者より惡意を以て遺棄せられたる時、
七　配偶者の直系尊屬より虐待又は重大なる侮辱を受けたる時、
八　配偶者が自己の直系尊屬に對して虐待を爲し又は之に重大なる侮辱を加へたる時、
九　配偶者の生死が三年以上分明ならさる時、
十　婿養子緣組の場合に於て離緣ありたる時又は養子が家女と婚姻を爲したる場合に於て離緣若しくは緣組の取消ありたる時、

是等十條の場合に於て裁判に訴ふるを得るものとす、中古の戶令に

凡棄レ妻須レ有二七出一、一無レ子、二淫佚、三不レ事二舅姑一、四口舌、五竊盜、六妬忌、七惡疾、皆夫手書棄レ之、與二尊屬近親一同署云々

とあるに比すれは新民法の完備せる同日の談に非す、又德川時代の武士敎育に於て、一旦婚嫁すれば我家の女に非す、既に死せるものと見做し、若し去らるゝ時は死するの外に術なかりし如き嚴酷に過ぐるものとも同一視すべからす、法の備はる民をして恥なからしむる者、以て吉祥と云ふこと能はざるも之れ度し難き病患者に對するもの洵に止を得さるなり。我邦の如く離婚の多きは、眞に臧民の不幸と云ふべし、痛さざるべけんや。

第四、家族軟弱病

定義◎家族軟弱病とは、其之を組織する元素の年齢に於て非常の懸隔する者、又其元素の不和なると及び父又は母の早死すると並びに家計の不足等を包轄す。何れも獨立せる病なれども之を總括すれば、皆組織軟弱病と稱するを得へし。

原因◎軟弱病の中、組織者の年齢に關する者は、之を早婚、晩婚の二となす、早婚病は血氣にはやり、情欲の發する時、之を抑止せざるより來り、晩婚は妙齢の時を仇に過したるものにして、元素不和病は夫婦の氣儘氣隨、舅姑の老熟、嫁の未熟より來り、家計不足病と親の早死とは其原因種々ありと雖も共に家族を軟弱ならしむるに至りては一なり。

症候◎早婚病者は夫妻の身體充分に發育せざるを以て、其產む所の子女從て弱く早死し易し、未だ世事に通せざれば家事經濟に不如意を來し、又已に早く一家を組織するが故に相當

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

の教育を受けず、從て子女を教育するの道に通せず、晩婚病者の中、夫四十前後にして妻二十歳以下なる如きは、夫早く死するを以て妻の未亡人となるや、年尚ほ若く情欲未だ衰へず、爲めに赤き信女をして往々犯迷せしめ、子女の教育を完ふすると難し、又夫と妻と、年齢非常の懸隔あれば、老たるものは若き者を玩弄物視し、單に可憐瀟洒の美形として待遇し、妻よりの同情同感を得ること能はず、故に快樂の趣味互に異なる、又若きものは老者の心事を忖度し難きを以て、其心事は爲に同情を寄せ難く、殆んど寄生する如きものなり、元素不和病者は、屢々爭論を試み、寺参り嫁の噂の捨て所となり、井戸端會議となり、人生の不幸之より湧出し來る、自家の欠點を喜んで他家に洩し、他をして可笑せしむるの醜態、殆んど忍ぶべからず、父又は母の早死病は、即ち之れ家族破壊病にして、家計經濟爲めに亂れ、家庭教育爲めに廢せられ特に貧家に於て命の柱たる夫の妻子を遺して死する如き、妻若く賢明なるにあらずんば、殆んど路傍に迷はしむ、乞食小僧となり、貧民窟に彷徨するもの多くは是れ、但し此の如き極端に達せざるも、子女の教育は、正當の兩親存在して始めて好結果を得るものなり、世には早く父に別れ、母一人の手に育ちたる英雄豪傑もありと雖も、そは異例にして、正當の教育は男性と女性との双方の感化を俟たざるべからず、又家計不足病は家族全般の組織と運命を左右するの力あるもの、家計の不如意、嗚呼、是れ人間萬事罪惡の根本なり、あるは詐僞取財、あるは竊盜、あるは强盜、あるは殺人、諸の罪惡は金と色より來り、就中、其大なるものを金となす、假令法律上の犯罪に至らざるも、義理首尾を欠きて人の信用を失ひ、好ましからぬ業をも營み、身を浮竹川の淵に汚がし、又は子女をして惡衣惡食の止むを得ざらしめ、之が教育を怠り、その立身を爲さゞらしめ、人の指彈を受くる、皆之れ家計收支不償の結果に非らずや。家族軟弱病中の最重患と云ふべし。而して何れも種々の合併病を有するものなり。

●豫後。豫後は何れも不良たるを免れず、早婚病は、若年寄となり、家計不如意なる恐れあり、晩婚病は子女の教育不充分の中に早死する憂ひあり、元素不和病は、急性家族分散病を進發するに至り、家計不足病に至りては、慢性不和と慢性分散とを進發し、世の信用を欠き、時に刑事上の罪に問はるゝ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

に至ることあり、後者の經過最も注意を要す。回復の機を遲からしむれば、遂に危篤恒心を失して、罪悪不義續出せんなり。

治療。早婚、晩婚ともに治療すること難からず、一は社會の制裁にて、不幸可憐の實例を擧げ之を戒むるにあり、他は法律の規定なり、新民法は、其第七百六十五條に於て、

男は滿十七年女は滿十五年に至らざれば婚姻を爲すことを得ず

と規定せり、こは法典調査會が本條を草案するに先ち、特に之を醫科大學に諮問し其意見を斟酌したるもの、我國人の身躰發達の度に適ひたるものと云ふべし、然れども出來得べくんば男二十五歳前後、女二十歳位に於て婚姻するの習慣を造るを可とす。晩婚は夫たり妻たるも共に初婚者にして、又共に同年輩の晩婚などは、其害少しと雖も、己が子女の發達せる狀態を見ずして世を去るは、敎育上の害なり、又假令生命保險の如き餘慶ありとするも、未亡人となる者の爲めに氣の毒なるのみならず、時に未亡人の不品行を招ぐことあり、故に子女の立身上に害あることを納得せしめ、且つ趣味と感情と互に憑らざることを敎へ、以て年齡の過度に懸隔せるものと婚姻せしめざるを可とす、父又は母の一方の早死するは、人力の如何とも爲し得ざる所、母の死は繼母を現ずるか、獨身と現ずるか其一なるべく、父の死同じく繼父と現するか、寡婦となるか其一なるべし、是等は父たり母たる者の年齡と其子女の年齡如何によりて決せざるべからず、子女極めて幼少なれば、正母と繼母正父と繼父との區別を立て難きを以て之に慣るゝこと速かにして且つ易し、之に反すれば慣るゝこと遲くして且つ難し。然れども相手なくして過し得ざるは普通の人情なり。吾人が廣き事實によりて見たる所によれば、繼父は亡父の兄又は弟たり、繼母は亡母の姉又は妹たるものを取るもの、最も和合するに近きが如し、蓋し是其子女に取ては叔父たり叔母たるの血緣あるを以て也。決して他人の新入せしものと比較すべからず、而も是等は只管其子女の敎育と自家の職業と、又其自らの年齡とによりて決せらるべきものなり、家を善治するものは國をも善治すとは古人の金言、若し夫れ家計不足病に至つては、それがし記者も亦往々憂ふる所、其治療の如きは、大方の諸賢より承らんこと寧ろ興味多きが如し、要之、家族の疾病は、至誠の心を以て信義を重んじ、正直にして勉强、以て事に從へば大概癒さるべき也。

（説無識庵作之）

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

評論

當今の畫を論ず（上）

八木文卿述

全體此事は畫家に直接に談ずることでありますが既に一二ヶ條某先生に談しましたが決して抵抗はありませんが先入が充滿して居ます故心には入りませんと考へました故に考ますに畫家直接に談ずるより寧ろ他の御方々に聞て戴き夫より追々畫道の開くることとなりますれば畫家は製造人の事故吩咐がすくには居ません畫が氣に聞けないでありますがその他の美術も追來致て輸出物にも影響致し御國益の一端にも成ろうかと存じます彫刻等の通弊南山流行の時は屏風も掛物も額も陶器漆器彫刻等も其風の畫でいい近來文人畫が流行にても又其通であります夫故皆様の御耳を借て御閑暇の万分に補ひんと存します。

我國の美術思想繪畫心に富たることは今日申す迄もなき事でありますから改て申しませんが繪と圖とは同しことさ異なることがあります古よりあるは其次は圖其次は繪畫致し圖々が文字の時は多くは當此草稿形様々の描寫でさな描きたるは繪で物の形物の形に筆も能力もなきものは圖法を借りて取りて色々むつかしく成て法則の既なくば繪でありますす丁度固有の仁義心が禮儀に依て區別か明らかになりたと同様でありますす夫故に自づから漢學詩學は支那に不及様の思がありましたが明治維新に交通するに至て始めて世界に超然たるを知るにいりました。

然か明治八九年の頃と存じますが某大博覧會に金銀の彫刻物で大に名譽を得ましたのは金銀の名譽でなく彫刻でありますす彫刻の元は即ち畫でありますす。十二年の頃某國にて日本畫の勢力が盛に行はれ際日本は幼少のときより箸を用ゆるに慣れて指頭に自然の力があるのでありますから到底西洋人の及ぶ所に非らずと議定せりと。

廿年私が日光に遊びしとき聞きました某國西洋人が内殿の探幽の下圖を彫刻したる杉戸に涎を流し之か求めて強て止みませなんだ仕官某日本國に二つなき故とて幾多の値にても與くことは出來ぬ交易なれは致さんと申せば西洋人喜で何と交易せんと云ふにとき御身の國と交易せんと言しかば西洋人も笑て止みたりと最も杉戸の貴きに非ず圖の宜敷故なり。

如此西洋人の日本畫を嘆賞せしは日本古畫の類狩野風俗繪土佐圓山派なり文人畫は之を度外に措く勿論鑑識の異なることは雖とも又故あることと存ます

畫の難きは人の知る所にして三年や五年で十分出來るものでありません其用筆の大略であります是を以て前の話と言ふにはたりません。

然るに文人畫の如きは蘭と四君子山水及草畫の花卉等畫き覺へますと既に畫家の氣取りにて我國の鳥は雀か燕雁位にて美麗なる可愛らしき鳥にて目前に飛び戯て居るを見て日本の畫は俗でいけぬと云見たともなき支那の白頭翁やはゝ鳥や黃鳥など畫し畫き鯉魚は畫きても鯛や鯉は俗だ々々と云て畫かず懸崖直幹でなければいけぬとか氣韻が高いとか雅致があるとか云ても日本の人畫事は畫き得す櫻は日本の名花なれども俗だから畫かぬ海棠なれば雅だから畫くと如此も一身の樂みに止れば格別事を以て畫家と云はるる者は此固陋の眼を醒さゝる可からず。

畫の流派は多しと雖とも今二三を擧て申さんに狩野土佐住吉光琳は其固陋を脱するゝ能はずして格俗に陥り易すく圓山派は寫生に流れ貧物と畫との區別を失ひ雅派は風俗に走り市氣に陥る恐れあり支那の北宗狩野は之に依り南宗は取て文人畫と云擬ら文人畫家尤も畫法を墨守するて調子となし双鉤を用ゆるは古人に例なしとてくまどりなどの都合よきにも不用筆力強健なるは固ひと云て嫌ひ軟弱なる者は柔なりとて好む古人云筆力扛鼎軟弱なる者病得之。抑も固きと云は頑固固着にて進と退と相反し進まんと欲して筆動かざるもの劔術を學ぶ時に固くてはいけぬすらすらとさうとすうゝと突け夫では伸ひぬ又夜るなど云ふ事あるは世に云固いのであります。

柔に放心平易志到り筆臨ふ泰然不動者を云ふ柔術を取りますときは柔かに曳けは行き突けは退け言はるゝ内に少しもきたなと思ひますと直に投げられます。

或は覇氣がある覇氣を強ひと云も殺氣の如く考られますが覇氣は孟子の所謂覇者

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

の民は隨處如たり王者の民は皞々如たりと則ち此氣であらうと考ます。

竹田翁が江戸の畫は覇氣ありと申せしも決して殺伐と申したのではありますまい又狩野派などの山嶽岩石の角立ちたるものは皆覇氣と誤認します然れば斧劈皴柴馬牙鬼面等の山水は皆覇氣でありますか。

覇氣は驩虞如でうれしがる意畫に就て言へば氣のきいたとか粋なとか俗眼に入り易く俗情に適ひ易きを自ら求むるの氣なくして得る者皡々如は何ともないけれどもどこやら面白いが言に盡せぬと云が如し是が畫の醇乎として醇なる者と云べきかと思ます天眞爛漫もこれであらうかと考ます。

市氣は美麗にして俗眼を眩し世に賣らんとするの精神畫上に顯はれたるもの遊廓の店つきの如し。

俗氣は賤劣見るに耐へざる者書きすぎたるより先ず拙畫はかき過であります地圖物圖の如し夫故に花卉なども輪廓を用ひて塗り上げたるより沒骨法が輕くして面白し畫は寫生寫意に別なく美麗なる者をわざとゝきたなくし又は手を省きて畫に拘泥せざるを示すもあります物のなき地に物あらしめ墨點一ツハ種々の働き譬へば松一根下に社らしき物を前景にして遠景模糊の間に一點あるは瀬田の橋とも見へ淡墨一抹は石山とも見へ連點ある處は堅田とも見ゆるが如し聲なきに聞き形なきに見る畫の妙は見る人の固有の繪畫の發輝するを貴ぶ何流何派に拘らず多く見多く聞き多く畫かざれば此地に至るは難し。

又恰合と云ふをも知らなければなりません譬へば洋服人物なれば蝙蝠傘や帽や靴か恰合ます雨傘や菅笠や下駄は似合ません束髮の女に振袖や襠は恰合ません漢畫の山水は唐の服裝日本人物には日本風の山水樹木家橋花鳥蟲魚に至るも其通りであります。

漢畫家にして日本は山水に富て居故態々支那風の山水を畫がかずともよいと云て點景人物は日本今日の服裝なれども其周圍の樹木家橋皆唐畫風故に恰ら日本人が支那漫遊の様であります是は恰合ぬからであります。

昔日の如く自己の流派に拘泥して他を顧ざれば益々固陋に陷るより外なし。

然れども皆長所あり狩野は人物土佐は宮殿に長し圓山派は花鳥に長し文人畫は四君子山水に長ず然れども眼識習慣上より來るを多し先入主となり自分目に多く見ざるより好まず好まざるより見へず故に他の流派を下品とするも知らず己の畫眞に下品にして人の彈指する所たるを知らず

かく申すも自分の流派を拋棄して雜派になるが宜敷と言ふに非らず其好む所に隨ひ其愛する所を十分琢磨し畫の眞粋を知り然して他の眞味も知らざる可からずと言なり藍より出て藍より青く水より成て水より冷たきを欲します。

古人の所謂其好む所ろ其惡む所に僻するなく好で其惡を知り惡て其美を知るが肝要畫書にも師學短を棄つと言てあります。

古人の逸事中にありました弟子に曰く我の畫を學ぶなかれ自分の畫をかけと此言は大に趣味があります。

孔子に孝を問へば人毎に違ひ仁を問へは又其通り仁や孝が違ふのではなく學ぶ人の性質によるのであります孔子が意なく必なく固なく我なしと教へました畫も意必固我を脱せなければ進歩は覺束なし。

畫家往々古人の粉本を丸で寫して居ります古人の粉本は詩の作例と同しければ粉本其儘に用ゆれば絕句類撰や詠物詩集我が詩の様な顏をして居る者識者の笑を招くと一般秋季展覽會に多見る所なり併し摸範として位置配合等を敎ゆる爲めの物は之に異なるなれども可成變更するがよろし唐宋以下古人の畫花鳥は位置尤も惡しき者多し必ず改良せさる可からず。

假令自分は畫を畫かずとも此流は好き此派は嫌と申さるゝも矢張り習慣より來た者と考ます何となれば今日四十以上の御方は大抵南宗畫を好まれます以下は何流何派の差別なく理窟論に適ふ者を好まれますこれは四十以上の御方は文人畫流行時代以下は西洋畫論時代であります。

文人畫のみ好て他を顧みざるは鯛の鹽燒まぐろのさしみ是は好きだから何んの爲に牛肉が喰けるゝ者かと云如し。

西洋畫論から言て此山の向が見ゆるものか是は大きすぎるこれはこますぎると言ふも畢竟西洋畫と日本畫は組織が違ふ事を考へぬからであります。

西洋畫は自然的寫眞的日本畫は自然と想像とを混合せし故心を萬物の遙上に置て下界を視下すときに高山の背後景富嶽の頂上も見る事が出來るのであります。

世の開明に隨て見へぬと思ふ者も見へ出來ぬと思事が出來る様に成ます其證據には馬も引かず帆もかけぬ滊車や滊船が走り舛雲の中で太皷たゝいて居る鬼が御

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

飛脚や御醫師の擧手を致します今に月宮殿へ輕氣球で往復が出來るかも知れません阿々畫は宗教の如く其道は異なるも至る所は一つ即妙畫であります秦の始皇が六經を焼き亡し漢に至り復た起る故に漢學と言ども畫は誰れが亡し誰れが起したる故に漢畫と申せしが漢學に伴て來り我國の模範となりしは唐なり故に唐畫と云傳ふ然れども流派を問へば私は漢畫なかくと云て唐畫なかくと云はず漢畫指南とか漢畫早學とか題せる書あり又唐畫何々と題せる書あるを知らず唐代も亦古し故に界魚馬蹄の深なきを保へず。

殊に今日支那畫道は陵夷殆と地を掃ふと云べし然れども漢畫家尚及ぶ可からずと思ふ迷夢亦甚しい哉。

今日は古名家の筆意鈎法點法等は其好む所に從ふと雖ども其自己の畫く所は國畫の精神ならざる可からず思想は世界獨秀の念なかるべからず自然的寫眞論に陷り固有の筆力を失ふべからず世の嫺畫に流れ國家の美響を損すべからず。

今日美術上勸奨保護なるに際しては何 美術の根元たる繪畫に從事する人は勿論其道に志ある人逐次進歩と固み破り濶を脱し美術の國粋を發揮 畫の妙理を擱かざる可からず必ず西洋人の模擬のみを貴ぶに非らず國家に對するの勉なり。

畫の妙に二様あり一は幻妙一は精妙幻妙即寫意精妙即寫生幻妙は變異通理精妙は現象追尋へば吳道子地獄變相を作る人をして戰慄ならしむ應擧十雉の圖を見れば惟狀再び見 に不忍七幅の畫を見れば心爽に神伸蕭然一二木殘雪已消春風暖の意あり枯葉一葉只夜の涼味落葉小閑野秋の風味枯木寒鴉冬景目縁皆人をして無形の現象を起さしむ如此に畫物皆畫家の約本有形と無形と相待て妙理を發す然れども無形は有形より貴し殊に畫は書と違ひ形已に備てある故意に心を用ゐなければなりませぬ書は形已に備てある故に形に氣を付けなければなりませぬ譬へば土の字は形が一點多ければ王哉すれば土と大相違になります。

その面白き資料にあらず骨にあり肉の甘さも肉に非ず味にあり人の貴きも人に非ず心にあり其通りで無形に妙があるこそ畫の妙は人心に感染する尤も深し西洋の畫に畫を央むは理を窮めたるといふ可し。

又[illegible]日本畫は[illegible]人で已にたる[illegible]心を[illegible]ましめざらずしらず心は高尚に進み[illegible]すなく息なく[illegible]之を[illegible]であります此様なら[illegible]ありますから畫は風俗を亂るは勿論殘酷なる畫も不善。

譬へば鷲を畫くも猿や兎を裂かんとし又は猛獸相闘て一は血に染み一つは斃れたるよりは寧ろ鷲勇氣を貯ふが懸崖怪木等に立ち虎月下に嘯く餘地あるにしかず。

前回の博覽會裸體美人の畫に付ゝ種々の論あれども又假令西洋にて如何なる喝采を得たりとて彼の國は彼の國我國は我國私は風俗上より畫かざるをよしとす幼稚の今日美術上超逸の美術を示すは利害の如何を知らず。

抑今日の畫家流派の何たるに拘はらず互に肺腑を吐露し長短相補ひ眞の日本畫と稱するに恥ざらんことを冀ふ故に先づ固陋の眼を破らざる可からず。

殊に美術家の最も大切なることがあります古人も初めより名あるに非ず大雅も扇子を瀬田の橋より投棄し應擧も死に就んとし華山も貧困し山陽も亞朱にて窘て揮毫し蓉齋も絹本密畫を壹分に賣る登斐湖の畫が天覽を得たるを以て直に什經御覽の印を刻して誇りたり。

今日は中興我々の畫にして恐れ多くも高貴の御壁に掛る拝明世に生れ居るの幸福ない是を思ひ彼に想へば畫家たるもの其心を正し其行を清くし假令一水の扇一片の絹紙も千金の屏風も其嘱する心は一にして其畫を愛せらるゝ者なれば輕率の所爲ある可からずと存じます。

◎附　錄

和畫の理會し難きと研究の良法を求むるに苦む久し世間亦同感の人無しとせず今二十題を設け世の見聞と部冊を揭け之を博物に質し別に此題により廣く諸彦の高説を募して以て同意の人に分たんと欲す

◎和漢畫の濫觴沿革　（漢畫）

點と線と交合して形象を爲すを畫と云ひ繪と云ひ圖と云古の事考ふ可からずと雖とも伏犠の河圖を得八卦を畫きたるに始る而して形象の字（書の六義）鳥跡蟲魚の字皆畫より出書の益稷十二章尤も明著なり論語の繪事後素設色之法既有秦の始皇書門を沒く詩に至て復興る故に畫の稱あり晉魏以來一張一弛唐に至盛に南北兩宗をれ[illegible]宋帝明に至り大に隆盛し[illegible]至り衰ふ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

◎本邦繪畫の濫觴沿革

神代記に宜圖造彼神之象云々

神功皇后三韓征伐の絛收圖籍云々

應神天皇の朝異國より貢し來れる綾部の工女あり錦綾を織らしむ其頃より唐草の紋形の草稿あり

日本の繪畫は支那朝鮮より來ると云又印度地方より支那朝鮮を經て來ると云希臘より來ると云と雖も神代より既に存せり

出雲風土記卷の上に(惠曇郷)とて素盞嗚命の御子磐坂日子命國巡行坐時坐其處而詔此處者國雅美好有國形如畫鞆哉吾之宮者是處造事者詔故云惠伴神龜三年改字惠曇かくの如く繪鞆なるもの既に磐坂日子命の時に存す繪鞆なるものあるあらば丹青を以て彩りたるを知るへし黒川眞賴氏上古陶器に彫り著たる人の形筑後國上妻郡大内村大伴波如麿か墓の槨内に建る石人に示し又和泉國大島郡舳松村にある仁德天皇御陵の石棺又武藏國荏原郡大森村より掘出したる陶器に畫ける彫圖は丹を用ひ筑後國にて發見したる石窟中の華紋の如きは慥に神代に於て作られたる畫なると證するに足るものなりと言はれたり

雄畧天皇御宇(七年)に百濟國より因斯羅我といえる畫師を貢す又同帝の御宇に魏文帝の後安貴王なるもの畫部の衆を率て歸化す安貴王の子辰貴一名男龍なるもの繪事を能くす　武烈天皇其能を美し給ひ首姓を賜ふ五世の孫勤大壹惠尊も亦繪に工みなりしかば　天智天皇御世に姓を倭繪師と賜ひ　稱德天皇の神護景雲三年復た大岡忌寸の姓を賜ふ大岡家は　武烈天皇より　稱德帝に至る迄凡二百七十年間畫を以て奉仕す又　用明天皇の御世に百濟の畫工白知と云もの歸化す　孝德帝の御世には狛竪部子麻呂鮒魚戸直等佛像を寫す畫工たりし高麗の師麿は高麗の畫師にして歸化し　齊明帝に仕へ天武帝倭畫師音擣に小山下位を授け賜事等書記に見えたり　朱雀　村上帝の頃巨勢公望公忠飛鳥部常則等の畫師出づ

朝廷に於て畫工を措かれたるは大寶の令に中務省に畫工部を置き正一人繪事彩色を學る拾芥抄に畫所別當あり五位藏人畢畫等を預る大内裏の畫所は建春門内の東脇御書所の北に在りと

武家の世と爲て信實の諸人ありて畫所の名空しからず又奈良には春日宅間住吉民部芝の四法眼あり。應永の後に至り繪所には土佐の一家あり

足利時代に至り(足利義政)如拙周文雪舟光信元信の如き妙手相接して現る

德川氏に迨て狩野家の一門十餘人累世の繪師に任し又別に土佐家住吉等を奥畫師に任す

幕府繪師を待遇する厚きを以て大小の諸侯皆繪師を措く

德川氏の制繪師醫師例にて俯躰故に法印法眼に叙せらる復國庫費を以て扶持し政府の力を以て十分に保護を與ふ

韓國の畫法先に入り唐國の畫之に次く其畫法共に一變して我國の畫風となる寛平延喜以降の畫風は純然たる日本畫風と云可し巨勢飛鳥部常則等蓋し之なり

初には濃厚著色の佛像を畫く後山水人物草木花鳥等に及ぶ五山の僧侶宋元の墨畫を傳へ足利將軍以來點茶盛に世に行はれて繪畫は淡泊氣韻を以て勝れりと爲す

文人畫は即ち支那南宗畫法の傳來唐に南北分れ宋に起り明末清初に盛なり(北宗畫は我國にて所謂唐畫なり清國に衰亡す)其傳來は明末の亂を避けて我國に歸化せし隱元木庵即非逸然の諸法師皆畫を作り楊愼陳元輿の諸人も亦歸化して巧に畫く始て南宗の畫風我國に傳播す夫より清商の長崎に齎す畫皆文人風北宗の畫幅極て罕なり又長崎に來る清の畫沈南蘋の寫生を旨とするの外伊孚九費漢源江稼圃等南宗畫たり池の無名始て之を學び一家を作す又漢學詩文の盛に行はるに伴て巧拙を問はす貴重せられ文政天保の頃より四海に普く是か爲彼の倭畫唐畫一時厭倒せらる明治十二年繪畫共進會の設ありて倭畫唐畫復興る

我國の畫　欽明帝　推古帝の御時より三韓の畫法を持來し之に我國固有の畫法を混一して上古の倭畫師の畫法とす之上古韓畫の時代なり次に　皇極帝　孝德帝の御時より唐國の交通を開き唐朝の畫法を傳へて盛に行はる之中古唐畫の時代なり次は延喜天暦の時より唐國の交通漸く絕へ唐畫も其風を變し一種の倭繪時代とす又正安嘉元の頃より宋元の畫法我國に傳來し可翁初て出て雪舟元信其後に出で探幽に至りて其盛なるを極めたり之を北宗畫の時代とす文化文政の頃より南宗の畫風世に行はれて近時に及ふ迄其盛に達す之文人畫時代なり今也和漢西洋の論なく流派の別なく一般繪畫隆盛の時代なり。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

隨感

海舟先生逝く

大寒に入るの前一日、天氣晴朗たり。此日海舟先生意氣ことに爽然として、快談百出す。午後、入つて浴して後ち微しく異狀あり、少らくして、胸頭激痛を起し、惡汗流れ發す。命じて之を拭はしむるとき、顧みて微笑して曰ふ、今度は死ぬるぞと。湯を求めて未だ許らず、忽焉として倒れ、之より長眠せらる。

呼、眠れると覺めたると、其間尙は接續ありや。彼の逝くものや氣息絕する時、神魄去り、生死判然に分れ、幽明立どころに隔たる。其の距離千萬里、長久へに之を喚ぶと能はず。音容は眼中に存すれども、其人なし。死骸は猶ほあれども、其の聲なし。抑そも、氣息の絕するとは、何の事ぞや。

先生平常一事も苟且にせず。其の臨むときは嶄然として至誠一發し、寸隙も遲疑せずと雖ども、其の慮ばかるときや、忡々悶々として、千思萬考を傾盡し、快く飲まず快く喫せず、必らず病む。故に、其の熱慮あるときは、大抵病み、病むときは、必らず深憂あり。如斯きも、少なきは數日、長きは數年、一意たゞ國家の爲に憂ふ。此の憂ひ醫藥の能く治する所にあらず、先生の大率ね醫を斥けて用ゐざるは、此の故なり。曩には、數年此の大憂を耐へ得て、身軀、俄然再活し、明治三十一年に入りてより、英氣頓に加はり、光采四發、當り近づくべからざるの慨ありしに、昨年末より再たび、沈思に入り本年に亘りて猶ほ決せざるものゝ如かりしが、老體、其氣力に伴ふを得ず、乘者發蹶として、馬倒れたり。卒然、腦溢血の譴に罹られたるは、必竟、老軀の最早や數十年の劇に堪ふる能はざるに至りし故なり。

誰か能く、先生の全體を測り盡さん。吾人の如きは、所詮、之に及ばざるもの也し。行て先生を見ると、少くとも一週一回多きは、二回に及ぶ。大抵、其の言動を聞き了り見了るが如くにして、而も殆んど迷ふ。屢は、愕然として嗟歎すらく、人間の修養も亦た斯く迄に老熟するとを得るかと。其の天稟すでに凡ならず、之を磨くに五十年の逆境を以てし、六十餘

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

年の苦學を以てす。此の間、一代の救濟をもて任とし、眼を四隣に放ち、思を密撥に潜めて、寸刻も休まずとせば、其の七十七年の今日に方りて大いに熟する所あらんは當然ならずや。而して、世人大抵は其の本領を窺はず、先生を以て啻に幕末の遺臣となし、其の政見を以て既に時勢に後れたるものとす。先生嘗て田舍議員を罵しつて曰く、余もし君の前に米麥の事を說法せば君能く笑はざるを得る乎、余の前に政治を說くは猶ほ斯の如しと。去年、樞密院の某、先生を慰さめて聞て曰く、先生何等の不平かあると。答へて曰く、大不平あり、明治三十年間の政治を獨力にて斯迄で維持したるに、諸君が之を叩き毀さんとする故に不平あるのみと。其の平生の任ずる所、大抵斯の如し。

嗚呼、吾人は先生に於て、偉大なる活例を見たり。先生逝きて、巨木拔けたり、大廈遂に危ふからざるを得る乎。時、艱にして偉人やうやく知らる。近年、少しく氷川伯に注意するもの、増加したるは、時代の困しければ也。吾人は固く信じたり、先生容易に死せじと。而して卒然として逝かる。人それ之を奈何んせん、天亦如何んともせむ。日暮、蒼穹に對して思ふ、邦家の前途を如何に爲し玉ふやと。吁、もし其人あらずとせば、邦家は則ち亂れんとするのみ。

但だ思ふ、肉骸容易すく腐化すれども、精靈は亡びず。先生數十年の經營と、一代の感化とは、豈に迅速にして消ゆるものならんや。先生常に曰く、余は精神の感應を知ると。其の一小室に横臥して、毫も狹しとせざるは、此の故ならん。今や、軀亡びて、感化長存す。惟ふに、先生の靈動は長久絶えざるべし。

大磯だより

當欄を置くの辭

湘煙女史中島俊子、久しく肺患あり。長城居士中島信行君亦た、病む。去年、家を大磯に移し、山を負ひ、海に臨み、園にかそゝぎ、渚に逍遥し、靜閑に悠々す。北堂亦た韻事を樂しみ、一家相ひ酬獻して風流雅興に盡きず。則はち茲に一欄を置き、特に請ふて其の餘韻をうつすさき、或は掲げ、或は休む、其の常なきは無論の事と觀ぜられよ。編者、紙上の讀者に告ぐ。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

初夢

中島俊

臺所の賑ひ太だ常に似ざるに、何事の起りしにやと出て見れば、老婆少婢等數人、平日見馴れぬ膳椀を洗ひつ拭きつ且語りつありし。何事の候ぞと問へば、母君の妹なる叔母君の、遠來し玉ふによると答ふ。吾は、これを聞くや、其叔母なる人を待つの情は、路程も泛び來らずして、只管ら、器物の散亂するを見、何人が遂によくこれを整頓するやを痛く掛念せり。折柄、玄關、人の聲するあり。出て見れば、年齒凡そ四十三四にてもやあらん、婦人の端立するあり。吾は、生來未だ曾て見し事なき程の麗人たるに、こは人間にてはあらざるかと疑ふ程なれば、容易に言葉も出へやうなく、只茫然とうちまもるのみ。婦人も亦一言を開かず、且莞爾ともせざりしが、其涼しき眼元と、飽迄色の白きに、微紅を帶びし頰には一掬の愛情潜み居る如く感せらる。而、其何人にか丸寫しの如く覺えたるも、稍丈の高さと、少しく肉の瘦せたるに惑ひ居りしが、覺えず聲を發したり。嗚呼、御身は、眞に、余が母君にておはさずやと、起て面を彼が袂邊に摩り付けたれば

婦人は是に於て始て莞爾たり。この刹那、吾が夢は俄然として覺む。覺めて倘夢の夢たるを知らざるもの丶如し。この夢に入りし吾は、如何なる吾、即ち歲倘五六歲なる童女。この童女の夢に入りて明かに童女の眼底に印せし母は、如何なる母、即ち齡倘盛んなる容姿を備ふるの母たり。吾は屢ば母の舊貌を追懷すると雖も、常に朦朧たり、未だ曾て此夢に入りし如く、明かに記臆し來りし事あらざれば、全く此夢の媒介によりて、其忘れたるの點を喚起し得るの思ひありて、無量の爽快を感じたるも、亦一時。夢魂逐ふべからず、靜かに枕を排して四顧すれば、夜氣轉た寂寥、枕頭には、青き光りを放つ殘燈と、今古感慨を齊しくする詩篇とのみ。悲歎吾關せずと、頻りに清香を送るものは水仙一盆の花、水仙の香氣に圍まれて、一場の魂夢に弄ばるゝ吾は、如何なる吾ぞ。夢裡に入りし五六歲の吾にあらずして、今は是病重きの身、佳麗の容姿を現せし夢裡の母は、如何なる母ぞ。今や是既に古稀の齡ひを過ぎ玉ふの母たるを奈何にせん。夢裡の壯氣、冷て氷の如し。人間咄何物ぞ、噫。

正知昨夜氷如レ年、眠覺看レ書倦又眠、
一枕清香々夢冷、水中仙護二病中仙一。

雜録

埠頭の佳人

[illegible]部有[illegible]

人力車は客を乗せて、元氣よく走り來るかと見れば、荷車は重たげなる鞄箱に柳行李と椅子など取り合せて、運び來りつ。稅關司撿所のほとりは、其處に一トむれ、彼處に一トむれと、立ち集りて談りあふものゝ仲間にて充つ。卑しけげる洋服の破れたるを纏て、酒にその身を痲痺らしやしけん、足もと怪くよろめき歩むは、そのあたりに荷物取り運びて賃取る高等なるたちんぼなり。轟々と響く車をレールの上に轉ろばし行くを見れば、野菜堆く積まれて中には豚肉の皮はぎたるまゝなるさへあり。之れも調へられて上等船客の口に入るべしなど思へば誰かは胸惡き心地のせざる。昔の女王エリサベスを繪に見し如き粧裝にて、おかしき羽をその帽に飾り、長く廣かりたる裳裾に、周圍の塵を拂ひたて、我れのみ好なりと身構へながら、ヴェールとぞ稱ぶなる怪く薄き絹に、少しにても我が顔の醜きを隱くさんとする洋婦人のあれば、時は金なりといはぬばかりに、忙しく敏活に立働く洋青年あり。その太く肥へたる腹かゝへたるは、豐なる洋商人のビールを嗜めるにて、清楚たる短裳輕衣に、滿邊なくたち廻るは、長く獨りなる女宣教師にやあらん、稅關の吏員は徽章の帽を戴いて右往左往し、巡査はあやしき密航婦などのなきにやと、端艇の出入に注意を怠らず。何れの國もおかしきは、開港場の埠頭なり。日頃騷がしき英吉利波止場は、けふ十二時郵船コプテ井ック號の出帆なればと、一層の混雜を加へつ。送り來るもの送られ出るもの、潮まだきよりこの所に群集し、餘所には一面の晴朗なるに、此處のみは時雨の絶ゆる間もなし。船頭はなさけなくも荒けき腕に力いれて、かけ聲勇ましく友の誰彼を運びゆくなり。そのふる領巾は限なき怨みを宿するやと思へば、そゞろに哀れなる心地ぞする。港内には、彼我の艦隊砦をなして錨を下し、白地に赤き二本を染め出だせる旗する郵船會社の火船あれば、檣に蜘蛛の巣かけたる如き帆前船あり、此れとなく彼れとなく、何れを何れとも見わけ難し。コプテ井ック號は、紺地に白き角をぬき出せる出帆旗を亞米利加國

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

雄の下にかゝげ、すさまじく烟を吐く。道に布哇を經て桑港に行かんとはするなり。先程より一人の佳人齢は廿二三ばかりたるが流行の吾妻コートを着流し、海獺の頭巾におかしき顔を包み、人待ちげに埠頭のほとりをゆき來す。さる人の來たるを見て『布哇行の船は、すぐに發でるにや。撿疫のあればは十時には波止場を出づべしとのことに、見送らんものと態々東京より來りつ。布哇行の人々は既に乘込めるにや如何に』など氣遣はしげに問ふも、また哀れなり。之を[illegible]ぬれば、はや皆な乘り込み終れりといふ。佳人は[illegible]あればか、そのその船は何れにあるかと、問ひ返へし押し返へし切に之を見んとあせるものゝ如く、軀を棧橋の鐵欄にもたれて、眼を遙か沖のあなたにやるで嗚呼如何なる素性のものなれば、かくははるばる獨り來りて、恨みを人々の前に曝らすか。その風采の何となく美はしきもあるに、言葉遣ひの荒々しく賤しげなるは、いぶかし。されはとて、派手なる縮緬ラシャメンの類にもあらず、また素より女學生などにもあらなし。その顔の優しげに見えて、さかり手頭のこはこはしさも、またいぶかしく、吾妻コートの裾よりチラと出るを伺へは、

黄八丈の如く思はるれど、こは眞のものならず、君はかの人を蹈はしといへど、眉は婦には少し太きに過るに非ずやなど、人々の批評は皆なかの人の一身にあつまるほどなり。然り美なれども、人を惱殺するの靈力なしと杯いふ。事務長を載せたるP、O、會社最後の小蒸汽も、はや波止場を離れて本船に向へり。コプティック號の港を出るは、十數分を出でざるうちにやあらん。佳人は鐵欄にもたれて、船を見つむること前の如く、仲々に歸り去らんとする氣色の見えず、昔の佐世姫は松浦の濱頭に石の姿を殘せしと聞けど、この佳人は、鐵欄にすがりて遂にその身を鐵人に化せんとするや。されどその共に千古の恨事なるや一なり。思ふには彼の佳人一人の郎君ありて、自ら之に死るせど、郎君多く之を悦はず、今や故國を離れんとする時、佳人しきりに別れを惜んて之を送らんと告ぐるも、かの人そを愛しと思ひてか、諛るに明かなる時を以てせず。急ぎ來れば郎君すでに船にあり。痛恨何ぞ盡きん。せめては其船の出るを送りて心ばかりの別れを告んか。鐵欄に倚りて海を望むは、之がためなり。その顔の色さへ、愈々青ざめ來りて、一瞬は一瞬より胸騷かならぬ面持して波

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

立ち來るも哀にぞなりし。しばし棧橋の那邊の端までうろつき見ずやといふまゝに、友に引かれて行きしが、歸り來るも佳人はなほ鐵欄に倚れり。怪しきは、その傍らに立ちて、しきりに物語らんとする洋人あり。その顔だちの何となく下士ばりて赤き斑のそこゝにあるは、濃きウ井スキーに醉ふこと多き印とも見るべく、その洋語を談るを見れば、佳人も亦外國語を解するものゝ如し。かのマドロスめける異人こそ、くせものなれ。或は佳人を欺き誘て、之をわが手に陷れんとするには非ずや。われに願ふこと多き女人は、迷はされ易きものぞ。船はなほ動かず。佳人また動かず。もし之れをかのマドロスに辱さしむる如きことあらば、是れ日本男子の大恥辱ならずやなど、罵り勇むものさへあり。乃ち乞ふて査公に保護を依賴すれば、彼れ甘諾す木刀を撫して棧橋に向ふ。コプテ井ック去れば、佳人遂に如何。われ知らず。語を船中遠征の游子に寄す、暫くその綿々の情を裂いて、この多恨の佳人を憐み憶へよ。

（六三）

子を思ふの愛

櫻井鷗村

古への歌仙は、男女の戀愛を以て、人の情てふものあるのはじめ、ものゝ哀れは、これよりぞ知ると歌へるは眞や、其初め、人の心には未だ開かず咲かざるの花、冬籠りに籠れるもの、一たび青春の齡、軟風そよと吹き渡りてより、神慮に謀りませしがごと、若き男女二人相會ふて、意中の語らひをなし、心と心と、ひしと抱き結びて、燃え立つ自然の温まりありてこそ、彼の花は、一時に咲き出でゝ、万朶の爛熳たるなれ、かゝる榮えの盛、心々の春なくば、人てふ人、いかで、まとの愛の味ひをか知るべき。愛の花は爰に咲けり、さりながら、花てふ花は、色褪せ移ろい易きものにて、心の花とても、猶且つ然り、此花また美しき果を結び成さずんば、こはたゞ一時の榮華、朝槿の露ちらぬ間の衰へに等しからんのみ。

男女生れて人となりて、戀人あり、夫婦となりて、心に愛の花は開き、中に子寶の結びて、愛の果は實る。戀の盲と身をなして、夢にも現にも忘るゝ隙なく、鹿の谿水を慕ひ、鳥の

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

大空を慕ふにもまさりて、君の爲には、我百年の齢も絶まく欲しと思ひ煩ふの愛は、いとも潔く、いとも貴しと雖も、人の愛念を養ふ處のもの、若し夫れたゞ此事にのみ存せんか、そはまことに果敢なきものなるべし。情人も夫婦も、其初めは、人目も恥ぢず、戀に狂ふとのあらん、されど、こは久しかるべきものに非ず、思へ、同棲十年の後、連理の枝少しして往時の樂しみを有するや、家を營めば苦情あり怨言生じ、朝夕見狎れては必ずしも喜ばしき事のみは無く、昔は目と目と語りても、顏に紅潮を呈せしほどの戀も、次第に醒め行くやの感あり。况んや互に年老いての後をや、高砂の尉姥、其睦まじき、人の理想とする處なりと雖も、彼等に古への戀ありとは誰か思ふべき。

されば、男女を以て始まりたる愛に、子あるに至りて、遂に全うせらるべし。子は三界の首枷とはいへ、この首枷は、大慈大悲の御手に、人の爲と授け賜へるものなり。既に子あり、生るれば這へ、這へば步め、步めば知れと、日々に心を碎き意を用ゐ、苦勞の絶え間ぞ無けれども、憂ひも悲しみも子故に忘れ、力も智慧も子故に費ひ、愛着の念、糾へ結ぼれて、惡魔の利劍も、この羈索の爲には、鈍り果つべし。親子は一世、夫婦は二世とは、そも誰がいつはりぞ、三行半は妻に向つては授け得るとありと雖も、子には下すと能はず。夫れ詩歌によりて詠ぜられたる、人情の最美最純、以ていたく人を動かすべきものは何ぞ、戀人の情か、あらず、子を思ふの愛なり。淨瑠璃の悲嘆は子てふものを現出し來らずんば、其哀れは深きとを得ず。百万の寶も、子に及かじと歌ひしは人の眞情なり、すれ〴〵のいゝくさの中にも花咲きて、絶えなんとする夫婦のなからひも、あはれ忽ち和ぎゐるものぞ、夫婦の愛は、子の鎖に繋がれてより、始めて固きあり。

故に子てふものを育てしとなき男女は、よく人情に深厚なると能はず。假令天性濃情の人なりと雖も、其情の尤徹せざる至微至妙の際涯を有す。其初め戀を味はずして夫婦の縁を結びたるものなりとても、子によりて、子なき戀人よりも、愛情一段の深きわざを致す。異性の戀は人の命には非ず、子の愛は、人の靈泉なり救なり。子ありて後、眞に他の爲に熱涙を灑ぐ事あるべく、同情は初めて篤く、慈悲は全かるべき

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

なりし。

あはれなるかな、異性の戀ありて、心の花を開くに至らず、子の愛ありて、其實を成す能はざる、世の男、女の多くは、豈に哀れむべきの甚しきものに非ずや。深山の朽木も、心を花になさば成りぬべきを、痛ましいかな、彼等は、温き春風の見殘す處となりて、世を了るまで、まことの情の眞味を解する能はず。特に況んや、彼の老孃。キユピッドの矢は、いつとてもあだに外れ、齡の盛既に過ぎて、未だ才子を得ず、友は次第に好逑ありて愛兒を設け、憂き事しげき世にも、樂しみの源涸るゝとなきに、彼等は輾轉反覆して、たゞ〳〵多恨長歎綿々の情に悶えざる能はず。されば到る處として、何と無く、身邊狹き心地して、自から和煦なる情に遠ざかる。老孃の心は曲りねぢけたるものといふも、實に理りなれや、彼等は夫婦の愛を知らず、まして況や子の愛を味ふと能はざるをや。彼等の心の花は開かざるなり、あまりに冬籠の久しきが爲に、世態の雪霜に、折角の含はしぼみ萎えつゝあり。あはれ彼等を思ふ毎に、爲に代りて愛の神の、彼等にのみつたなきを恨まずんばあらず。されば彼等の爲に計る、もし夫れ遂に月下の氷翁に棄てられて、良婿を得る能はずとも、あはれにも諦めたらん時、即ち他の子を、藁の上より養ひて、之を育つるの苦を甞めて、辛じて其愛の深きを味ふべし。然らずんば老孃、何處に於て、眞の愛情と慰樂とを得んや。

飯坂温泉に遊ぶ

仙臺　無名氏

明治三十一年九月七日、余一友と共に、岩代國飯坂温泉に赴く、

此日風雨劇甚、遊びに適せず、たゞ今明日の中には晴るゝこともあらんかと思ひ、午前六時二十五分の汽車に乘じて仙臺を發しぬ、風は愈々強くして、雨は烈しく玻璃の窓を撲ちぬ、余獨り心に思へらく、

是れ皇天、我が生涯の有樣を示し給ふものに非るか、吾等の生涯は斯の如く艱難の風雨を經過せざるべからざるか、

と、かく思ひ續くる中に、汽車は白石を過ぎ、越河を越えね、窓前を眺むれば、雨漸く止み、半田の銀山、雲霧の間に見はれぬ、

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

アレが半田の銀山、アノ烟の出る處は、銀を製する處なり、といへば、友は頷きて之を見たり、

二時間半餘にして、汽車は長岡に着しぬ、下りて人力車を雇ひ、飯坂に向ひぬ、其間の路程僅かに三十町許、吾妻岳より下ろし來る風に逆ひ行き、やがて飯坂の町に入りぬ、名にし負ふ摺上の清流も、朝來の猛雨の爲め、甚しく水嵩增して濁流とぞなりける、其上に架したる十綱橋を渡り、岸に沿ふて少しく右し、又少しく左して遊廓の裏を過ぎ、上りて又少しく右し、石階を下りて瀧ノ湯の桝屋に入りぬ、

導かれて二階に上り、欄に倚て望めば、摺上川は直ちに眼下を流れ、高き前岸の彼方には、稲に行きかふ人の小さく見ゆ、たゞ惜むべきは、今日の此川なり、清流靜かに琴を奏づる風情なく、濁水滔々として耳に喧すしく、余をして轉た心に騷がしさを感ぜしめたり、

交る〱に入浴しけるが、湯は少し熱きに過ぎたり、晝飯後友と共に出でゝ散歩し、歸り來りて晩餐を了へ、又互に語るうち、長き日も暮れ、ランプは點せられぬ、慰めの天使は、吾等の魂を誘りて、華胥の境に導きぬ、

翌日、起き出づれば、日麗らかに風清し、丈高き桑畑の中を過ぎて、金瀧の湯に赴く、此湯は腦病に効ありと稱せらる、同じく摺上川の傍に在り、風景閑雅、愛すべし、暫く立ちて之を見、歸りて町に出でける時、質朴なる一老人は、我を敎師か、官吏かと思ひしにや、腰を屈めて一禮したり、十綱橋に出づ、此橋は西洋風の釣橋にて、長さ三十二間あり、これを渡りて左に曲り、湯野村を過ぎて愛宕山に登る、

山上に神社あり、數人の參詣者、吾等に先ちてありき、共に立て眺むれば、摺上の流れ、飯坂の町、眼下にあり、向ふには、吾妻岳、及び鬼面山の並び聳ゆるあり、清風徐ろに吹き來りて、吾等の心魂は、飄々として天國に遊ぶが如くなりき、

此日午後飯坂を發し、步して長岡に來り、二時五十九分發の汽車に乘じぬ、御前岳、高玉山、龍山等は、夕日に彩られて畫よりも麗はしく、昨日の風雨に引きかへて、今日の天氣の美くしさ、

吾等の生涯は、風雨の難を經ると雖も、遂にはかゝる好日美景を見るに至らんか、

と由なき事を思ふも、亦是れ凡夫の愚痴か、白石に於て、上

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

り汽車を待つこと一時間餘、爲めに我が汽車は後れて、六時半頃漸く仙臺に歸りぬ、停車場に迎ふる者一人、相伴ふて家に入りぬ。

今昔美談三則

きふくほ

◎中野三之助代官を斬る

昔松山藩士に中野三之助といへる人あり。嘗て隣境なる天領壬生川と、藩領との農民の間に水論あり。壬生川素より不正なり。然るに代官某は、天領の威を誇りて、敢て不法を爲すに當り、三之助は、農民五十餘を率ゐて、彼地に赴くに、豫め農民と約するに、一令直に堰を切るべきを以てしたり。既にして代官に面して、談判するに、彼れ暴を持して止まず、三之助激怒、刄を拔いて直に代官を斬殺し、農民に令して堰を切らしめ、己は直に江戸に參して、事を柳營に訴ふ。法司之を按ぜしに、代官の處置不當なるを以て、三之助の罪を問ざりき。

三之助また或時、浴するに、妻氏、衣を持して侍す。三之助、何思ひけん、熟ら妻の顏を打戍りしが、浴後、徐に妻に告げて、汝は絶世の美人なるかな、汝の美人なるが故に、予の武士道を守持するに妨げあらんことを恐る。故に今日只今緣を絶たんといひて、直に親里に送り歸したりといふ。

◎吉田倉澤の手杵奉行

同じ藩士に吉田倉澤といへるは、散官の頃、甚だ佃獵釣魚を好みて、山野を跋涉する際、親しく農民の狀を察して、郡奉行の非政を知る。因つて、自ら己を藩老に薦めて、郡奉行たらん事を請ふ、藩老言を左右に托して、久しく其請を許さゞりしが、一日藩侯、諸臣を延見せし事ありしに、倉澤進み出で、藩侯に迫りて郡奉行の任命を乞ふ。擧動不敬に當り、直に閉門を命ぜられたり。然るに幾くも無くして赦され、即ち郡奉行を命ぜらる。倉澤大に喜び、任地に就くや、農民を會し、天秤棒と手杵とを示して告げて曰く、今日までの奉行の政治はこの天秤棒の如し、藩士と農民との兩端は細く、中に立つ奉行獨り肥えたり、これ不可なり、以後予の政治はこの手杵の如くなるべし、主君と汝等との兩端肥大して、中なる予は細

かるべしと告白し、やがて槍の穂鞘を手杵形に成りて、巡視の時は必ず之をつかせしと云ん。

◎僻邑此傑人あり

記者の友に何某といへるは、同郷の畏友にして、夙に奇傑の名あり。彼曾て北海道に遊んで歸路狄の濱に上陸し、途を取りて仙臺に出でんとして、石巻より松島に通ずるの街道を過ぐるに日既に暮れて、懷中全く空し。某旅店に就きて、所持のケットを與へて一泊を乞ふに許さず。巡査駐在處に至りて、彼ケットを鬻ぐの方便の得んとして果さず。然るに、前の旅宿の主語るに土地の小學教員なる、長江雄四郎氏に寄らば、或は便宜を與ふなるべしといへるを記して、其人に訪へり。長江氏時に一家と晩食を取れり。我友を見て、旅中の困難察するに餘りあり、我家に一泊をとは申したけれども、我は養子の身なればと語るを聞きて、我友も他家の養子なりければ、情を察して、然らばと直に辭去れり。然るに長江氏は忽ち追跡し來りて、我とても、以前旅中に困苦を細にしたる事あるものなれば、同情の至りに堪へず、先きに我家を訪はれし時、友人らしき顔したまはゞ可なりしに、たゞ旅人とのみありし故、都合あしかりき。宿料は兎も角も計ふべきに付き、彼旅宿に投ぜられよ。明朝予も松島近傍にて開かるべき教育會に臨席するの約あれば、同行すべきを以て、再び我家を訪はるべし、さらば辨當を用意し置くべしとて、旅店まで案内して氏は歸家せり。此厚情あるにも拘らず、氏は我友に、君請ふ、其姓名を予に告ぐる勿れ、後日予、何某といへる人を助けたる事ありたりなどゝ記臆するとあらば、大に宜しからず、而も君は將來有望の學生なり。君若し青雲に乘ずる事あらんか、其時に當りて、余、君の姓名を記するが爲に、予は某の年月、君に加ふるに恩を以てしたりなどゝ思ひ出しては、甚だ不愉快事なりといひて、遂に翌日袖を分つの時まで、我友の姓名を聞くことをせざりしといふ。

翌朝我友に長江氏を訪ふに、妻君果して握飯を作りつゝあり、氏傍に在りて、妻君に目くばせし、暫時にして二包の辨當は出來たり。相伴つて途を行くこと多少、岐路ある處に至りて長江氏語るや、、予は之より此道に就くべし、君は他を取らば、暫くにして松島停車場に出づべしとて、また紙包を出し

て、察するに君は小遣錢にも差支らるゝやうなり、些少ながら之を受らるべし、仙臺には友人ありとの事なれば、京都までの旅費は工夫も出來べきが、万一不都合ならば、予は後より直に仙臺に赴く筈なれば、何所の何某宅にて金を工面し、置くべければ訪はるべし、旅の困苦は有勝の事なれば、決して用捨無用たるべしといひて別れたり。

これ實に我友の口づから語りし處なり、友は北海道に在りて報德記を續んで、大に二宮尊德翁の行爲を偉なりとし、其偉事果して行ひ得べきものか、果た又、キリスト山上の垂訓の如きは實行し得べきものなるかと疑念を抱ける折柄、彼長江氏の、身は神道家の人にして、職は小學校の一敎員に在りて、其心や偉、其行や大なるに會して、先きの疑念忽ち氷解したりといへり。友は後、京都同志社の學窓に歸りて、報恩の爲、或は書籍を送り、或は信を通じたるに、長江氏は、一回だも返信したる事なしといふ。我友なる彼れは、學窓に在るの日より、人の爲に己を棄つるを以て樂しみとし、逸事の傳ふべきもの、頗る多く、現に、我雜誌も、再度、美なる實行の活例として、彼に就きて記述したるとあり。彼の自ら榮とせざる美なる實行に比すれば、今時屢々新聞紙によりて傳へらるゝ、知名人士の逸事美談など稱するものは、遙に及ぶ能はざるものなり。然るに如此き彼は、偶然、僻邑に於て、大に驚歎敬仰すべき、此一大傑を發見したるなり。

新刊書

◎世界御伽噺 世界の始 附人間の始　小波編　博文館發行

小波氏の昔噺及び御伽噺に力を用ゐるや、夫れ勉めたるかな。日本昔噺、日本御伽噺は、前に三年の間に大成し、今歳に入りては、更に世界御伽噺に筆を取り、二十四編、四十八章を以て、北は氷洲より、南は南洋群島に至るまで、世界諸國の神仙談、勇士談、寓意談等を、隈なく尋れ求めて、其中、成るべく、壯快、雄大なる御伽噺を擧げ來り、氏が得意の筆端より醇乎として、描き出さんとす。吾人は其成効の期して待つべく、小兒をして、廣く智識を、世界の大におし廣げしめ、而して壯大なる詩的思想を養はしむるに、大に力あるべきを信ず。今既に公にせられたる其第一編を見るに、舊約聖書に基きて、猶太人に始まり、今は歐米諸國に普く知られたる、世界創造の思想と、また希臘神傳說のプロメイトスに關する創造談とを綴せたり、文簡易にして、意よく通じ、加ふるに不折氏の畫を以てす。其畫また妙に入り、苦心の跡歷々思ふべし。吾人は世界御伽噺の挿畫が、毎編、不折氏に成るものたらんことを望む、これ、此書をして一段光彩あらしむべきを信すればなり。

新雜誌の摘評は次號に載すべし

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

時事

農商工の衝突と政黨の制裁

山形東根

昨臘、地租増徴問題の紛々たるや、斯に農者と商工との間に衝突を來せり、尤も地租と共に市街宅地税を増徴したるが爲に、獨り農業者に限らず、換言すれば、地主に對する打擊と稱するを以て正當の見となす。されど斯に專ら農に就て言を立てん。

地租問題の爭論や久し、昨臘に至り愈議會に提出されんとするや、反對の側面に立てるは地主農家にして、贊成の側面に立てるは都市の實業家、則ち商工者なりき、此問題に於て先づ第一者に兩者の衝突を見たり、次に來るは選擧法改正にして、都市を特別の區となし、之よりして實業家を選出せんとする計畫なり。斯に第二項の衝突を來すものと云ふべし。

而して政黨に於ては、農家に忠信關係の少なからざる自由黨は、商工業者に意を迎へ、農者に背きて立てり、特に鐵道國有問題を提げて株屋連と結托し、邪へと接近することを力めて止まず、抑も鐵道國有は、普通教育の國家事業たる如く將た郵便電信の公共事業たる如く、或る場合に於ては大に望むべき事なりと雖も、其性質たる街道と均しく安價錢を以て自由に交通の便に得せしめ、私立會社が獨占暴利を貪るの弊を遮斷するにあり、然るに現今、官設鐵道の不備不完にして私設鐵道の比較的便利、繁昌なるの際、徒らに不必要の軍備を口實とし、債務の下落を救濟せんが爲めに之を唱道するは自由黨の人士が商工業者に結托を堅うせんとする野心に出づるものと見ざるべからず、自由黨は斯の如くにして益々商工業者の意を迎へんとす乎。

翻て進歩派を見るに、改進、革新の二派たる元もと紳士、學者派と目されし如き、性質あり、從て實業界の富豪等に少なからぬ關係あるに拘らず、地租問題に對しては飽迄反對し、却て市街宅地、酒造税に贊成を表したれば、地方農家の味方となりたるものゝ如し。

政黨の去就は、昨是今非、其政綱の如き亦變轉して確定せざれば、今俄かに彼れ農黨、是れ商黨と名け難しと雖も、今日の趨勢を以て見れば、進歩派は地方農家に與みし、自由派は都商の商工に與みするものと云ふべし。

吾人の斯に戒心すべきは、二黨派にして若し此傾向を持續するに於ては、財政上の問題出づる毎に、互に兩者の衝突をなして甚だしからしむるの一事なり。假令ば斯に土地家屋の賃貸料の如き、地代屋賃の額に應じて取り立つるの稅目、若しくば所得稅の改正率を定むる如き問題生ずれば、商工派は之に反對し、農派は之に贊成すべく、又營業稅特に商工直接の影響あるものなれば商工派之に反對して農派贊成すべく、其稅目の種類によりて兩者各是非せんなり。而して多數の制する所、如何ともすべからずして之に從ふの止むを得ざるものあり、

立憲政治、議院政治とは、則ち此の如きもの乎、利害の衝突する所は黨派の別るゝ所なり、利を得んとするものは自派の黨員を多く出さゞるべからず、故に選擧に奔走するなり。觀じ來れば、嚴朝の平凡政治、皆、之を理想とするに足らず。

斯の如きは是れ紛擾政治に非ずや。

惟へらく、農商工の衝突は、稅目の如何による、農者に不利なれば之に反抗する農者當然の業、商工に於ても亦然り各自、其不利を排して利を求めんとするは、人情自然の趨勢と云ふべし、斯の如きは古往今來、珍とするに足らず、是れ常狀なり。歐米の議員と雖も、其黨派を樹て互に競爭する皆な是れ、自家團体の利害の衝突を示すものなり。

然れども、政黨、則ち團体の意志を代表する議員の團結にして、今日の如く黨派の消長と盛衰とに全心を傾け、國民實際の事情を見ざるに至つては、將來益々農商工をして徒らに狂奔せしむるに至らん、是れ由々しき大事ならずや、

見よ、農家に味方せる進歩派は、自家用料酒の廢止に反對したるに、商工に味方せる自由派は之を贊成したり、而して自家用料酒の廢止は、國民の衛生上に如何なる影響あるや否や[illegible]せず、唯商工派に親切にして農家に不親切なるより來れるもの多きが如し、本議會に於ける形勢を以てするに、一方は獨りに商工の便唯六

ならんとに熱中　、地方は只管反對の氣焔をのみ高めんとして、悉く實際を察せず、偏に自己、自黨の消長に苦心して、賛否を决するもの丶如し。實に慨嘆すべき事なり。

將來に於ては、稅目漸く增加し、其稅目の出づる每に、農と商工と互に衝突すること大なるべし、而して多數の决する所に壓抑せらるとせば、農派は仆れ、商工派は起きん、其一起一伏の政黨に起るは、吾人雲煙過眼視して顧みずとするも、之によりて互に稅目を設け、自利を之れ顧みて、他利を計らざるに至りては、國民の不幸此上なし、之れ政黨者流野心家等の立身方便の爲めに、國民は犧牲となるに異ならず、見よ地租問題に賛成し、之に盡力したるが爲めに、政黨者流は早く已に大臣候補に數へられ、數十万金を得て、揚々たる如き事實は、言語同斷の始末と云ふべし、農家より絞りたる膏血が國家事業の爲めに用ゐらるゝもの、素より多大なるも、之に盡力せる者の報酬は獨り政黨者流の懷裡を暖め、彼等をして有福ならしむるに過ぎず。今日の政黨者流は濡手を以て粟を攫かむ投機商と異ならず、唯々最好の問題を發見し、之によりて自黨を利し、自己を益せんとするのみ。地租增徴、鐵道國有皆是れ。

されば、將來は稅目の增加と共に、農と商工との衝突は免るべからず、而して之に關係せる政黨者流の狂亦奔盛んならんとを期すべし、此故に公平の見を有し、卓越の心を持するものは、政黨と去就を共にするとは、時事の問題によりて決し、假令、變節と呼ばれ、狂漢と稱せらるゝも、實際上、國民の不幸となり、社會の不利となるものは、斷じて黨議に反して論難せざるべからず、今の中立派なるもの丶如き、眼中唯自家の利益を見るもの、未だ二大黨をして警醒せしめ、反省せしむるの能力なし、今や財政問題愈複雜となり、地方農民と都市商工との衝突益々顯著ならんとするの際、政黨を以て唯一の武器と信ずるもの、希くは、公平の見を以て其去就を自由にし、社會亦其去就者に向つて徒らに惡罵を試みず、國民の聲を代表して、政黨の制裁を嚴重ならしめんとを。黨は之れ實物の代表のみ、代表者は代表せしめたる實物の特性となるべきも、其の代表せしめたる實物を犧牲とするの道に非るや明かなり。

内地雜居と女子教育

鷗村

凡そ時世の機運は三十年にして元に還るとは、古へよりの言ひ習はせるが、頗る道理あるもの丶如し。然りとすれば、明治も既に三十一年を過したる今日此頃の時勢は、明治一二年にありつる狀態を或程度まで繰り返すものなるべく、されば何事に就きても、この二三年は、其既往に鑑みて、大に注意せずんばあるべからず。又三十といふ聲がゝりては、人間は立つといふ年輩なるが、新日本の國家とても、今は即ち同樣に、而立の覺悟あるを要し、特に本年七月よりは、各國との條約改正實施せられて、外人内地雜居となるものなれば、則ち、我國が始めて、國を開いて、外邦と貿易を通じたるより此方の國狀は兎に角、此歲にて一轉するものなりといふべし。故に我國に取りて、今年の如きは、上下共に一番の覺悟あるを要するなり。租稅は三分三厘となりたる他方には、歌よみ等の田家、炊烟豐に登るを歌はんとせる今日此頃の、世の態、さて如何に成り行くらんかは、慨世の人、各々眼を刮して、之を洞察すべきものなるが、何よりも先づ、新日本は齡三十を過して一二となれるとを考慮せずんばあらず。

去年去々年あたりには、内地雜居準備といふ事、流行し、教育、宗教、財政、商工業等あらゆるもの皆、此點に注目したるが、扨て既に今日となりて、何程の準備か成りたりや。此後は、大雨が降りかけて、急に堤防を修築するばかりの氣持になりて、此準備といふ事に急がしかるべし。然るに七月までに、其用意幾許の成功するや、甚だ怪しげなる次第なり。

他の社會の事は暫く措き、女學界に於ては、菊池大麓氏の嘗に文部次官なりし時は、内地雜居となれば、外人等來りて、多くの宗教的女學校を設立すれば、之に對抗せんが爲に、大に女學校を起して、其教育を盛にせざるべからずと論じたる事ありしが、我等は之を聞いて、實に意外の感を抱きたり。されど、教育界にては、内地雜居後の女子教育を如何にすべきやといふ議論は、折々耳にする處にして、或はこれにつきての實際の準備とか稱するもの丶考案中なるもあるべし。現に地方にても、これよりは女子とても、英語を遣能はずんば、外國人との交際に差支ありなどゝいひて、甚だしきは、東京の藝妓等までが、教師を聘して、爪紅さして、流行歌うたふ口にて、エービーシーを喋るとかいへり。或は七月以後には日本婦人も、外國婦人も劣らぬやう交際もせざる可らずと說く人もあり。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

要するに今の日本社會は、內地雜居といふ事柄に蠱惑されたるやの觀あり、女子教育社會もまた此蠱惑に捕れたるもの〻如し。されば、當節の女子教育論なるものは、假令昔の歐化主義に陷るの轍を踏まざるも、保守的なる中に、なほ外人に耻ぢざらんやう、劣らざらんやうとの理想は必ずや籠れるに至りたり。故に當節の女子教育論は　二十二三年此方の議論とは、自ら性質を變じ來り、而して暗潮の方向は、大に所謂世界主義とか進步主義とかいふものに在り。こは東京よりも、殊に、地方に於て甚しく、其證左は、昨年下半期以後より、地方諸新聞紙には、明治十八九年頃にも劣らぬ計りの女學論を散見すると多きに至りたる現象により て明かなり。

然るに七月以後に、何程の變化の來るべきかと考察するに、必ずや世人の豫想するが如き事はあるまじ。右がミストル、前がムッシュル、頭がヘルにて、隣の西洋人から引越蕎麥を配つて來たといふが如き現象には、立至る氣遣もなければ、何すれぞ、女子が、內地雜居の爲に俄に英語の勉強を始めざるべからざるの必要かあらん。商賈にも交際にも格別　必要もあるべき道理なし。況んや日本人と長屋に壁一重を隔つるのみなるも密接かまはず入り込むものありとすれば、それ支那人の張三張四輩なるべきたや。內地雜居とは、つゞまり、外國人が旅行免狀なしに、內地旅行のなし得らる〻丈の事なるべし。

女子教育の進步は　吾人の平生、希望し　止まさる處、多年の言論も、要するに此一點に在り。さればこそ今日の好景氣は　內地雜居を當込みての故なる事、其主因なりとすれば、甚だ心細く感ぜらる〻なり。やがて七月も過ぎ、來年の初め頃に、前々より氣に病みたる雜居の、何の造作も無きものなるを眼前に承知する時には、この一時の好況が頓挫を來すなき歟。凡そ永續不滅の基礎を望んで、爭々として之に進むの希望よりして、事を行ひ、業に當るものは、方衰へ、變ゆるとなしと雖も、一時來らんとする變化を大業に考へて、夫を第一の目途とするやうなれば、いよ〳〵望の時に至りて、沮喪失望せざるはなし。前年一旦女子教育の衰退したといふも、條約改正、鹿鳴館設等を大事に取り過ぎて、其當時には、家屋は洋館、衣服は洋服、食物は洋食と、日本の社會は一變すべし、我國と外國と同一の文明社會となるは、目睫の際に在りと想像したるが爲に、無に俄に西洋風の女子教育を鼓吹　たるものが、追々と、世は思ふ丈の事もあらざると知りては遂に極端まで退步したるに由ると、其原因の大なるものなりき。吾人は此既往を察して、今の女子教育をば、主として內地雜居の爲に奬勵するとならば、其衰運の久しからずして來らんとを虞へずんばあらず。

片々

●當世の夫人　當世夫人外に斷然頭角を現はすは、大隈伯夫人、後藤伯夫人及び井上伯夫人なり、或る記者之を評して曰く、三夫人を着物に見立てなば、先づ大隈夫人は白襟紋付、後藤夫人はれんれこ、而して井上夫人は、小紋なりと。（報知新聞一月十四日）

●昨年末より秋田一般に於ける　女子の詠歌非常の勢を以て進み來り申候、特に學校生徒に多き樣相見え候、師範女子部など仲々盛んに候、而して本年早々此風は市外町の商工家の妙齡婦女に波及いたし候、小生は此兆候の善か惡なるかは未だ容易に斷言する能はざれども、中古の俳諧師が『夫を尻に敷島の道』といひて、彼の女方道のあまりに詠歌に耽り、而して其極や醜聲を洩らすに至りたるを警めたる者ありしと如き、現象を見るなからん事を切望に不堪候、匆々頓首。（秋田日々新聞一月十一日）

●華族女學校の怪聞　といひて教育時論第四百九十五號に都城學人なるもの〻投書見ゆ。實否は知らず、其虛ならんとを望む。

●亞米利加女子　亞米利加に於ては女子の活動甚だしく其勞作に從事するもの一八七〇年には僅に一か九人のみなりしが昨年に至りては三一六三人となれ附屈となるもの六十人なりしに一五二二人なりしと

●北海道漁場結婚の奇習

●漁場　北海道の漁場は鯡鰊鰤鯸を漁するを以て第一なる漁業となす此漁業を爲すには無人にては到底其業を全ふするを能はず鯡鰊の如きは最も多く人の手を要する者なれば高き給料を以て多くの雇人を組み入れざるを得ず此に於て

●婚養子　の必要起りたりと云へば餘り酷なる話に渡れども十中の八九は皆其爲めに娘三人あれば三人の婿養子を爲し冬は山に登りて薪や漁材を伐採せしめ春夏秋は鯡鰊鰤等の漁業に從はしむされば一寸漁業家の內に到りて見れば何方が姉

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

やら婿やら何方が爺やら一家團欒の時などは中々見分かぬるも往々あり

●婿八人　夫れかあらぬか娘一人に婿八人は左程珍しからず只可愛想なるは子供なり、お前のお父さんはと問へばたゞ顔を赤らむるのみにて其父親の名を知る者少なし但し青海原に於て死に果たる者は此限にあらず

●契約　彼の家の娘を貰ひたいとか何處其處の内へ婿養子になりたいとか云ふ時は云ふ迄もなく媒酌人と云ふ者を以て左の如き契約を爲すは常例なり

（一）三年間嫁を貸りて其家に金を入るゝこと但し其家が貧乏なる時

（二）三年間如何なる難儀をしても其家の爲めに辛捧することを但し是れは網の一統を持ち居りて人並に漁業をなし居る家

（三）三年間辛捧出來ざるときは何時著のみ着の儘三行半頂戴しても故障なき事なれば、にや至る處已れは何處其處の内へ婿養子になり一年許り辛捧して居たとか又は何處の家の娘と三年連れ添ふて居つたかと云ふ者屈指に遑あらず左もあるべき事なり南部津輕秋田邊から出稼に來た者を彼れは良き若者たとか仕事は上手だとか云うて自由結婚同樣早速娘のお好次第婿養子にすればなり

●侍遇　は誠に滑き者なり或る漁業家の如きは時化の際難船して婿が海底の藻屑となり果たるを見て娵はさておいてウダマに對し涙をこぼしたることありと云へり是れを見ても其家主の婿に對する侍遇の厚薄推して知らるべし

●夫婦　從つて夫婦の情愛も亦受け取れぬ所今以て存じ居れり例へば女と女が久し振りにて會合し互に其後の消息を問答したる末にヤアヤアまだあの人と連れて居るべーかと云ふは常例の挨拶なり是れを以て見れば夫婦と云ふ者は一時の者と云ふ觀念を有したる者が夫婦別れの時妻が日割勘定を爲して別れたと云ふことあり但此例は漁場のみに限らず北海道は凡て此習慣ある處なり（江差日報）

●女子と美術　故加納夏雄氏の持說とせしといふは、美術の或部分に於ては、女子は男子よりも適當せり。女子の性情は平靜なるを以て、特に古型を保存するに於て、男子よりも其力を致すこと多かるべしと。

●女學家庭に對する言論

○上杉鷹山公の家庭…………江差日報一月一日
○家庭教育（浮城生）…………福岡日々新聞一月五日
○夫人の素顔（井上お武夫人）…………報知新聞一月六日以後
○女生訓（青柳猛）…………秋田日々新聞一月五日
○ドレーフアス夫人…………萬朝報一月
○衣服の述懷…………都新聞連載
○日本料理の說…………大阪毎日新聞一月七日以後
○婦人相互の交際…………國民新聞一月六日
○女子高等教育の必要（高嶺秀夫）…………女子の友第三十七號
○女子の天職（寺田勇吉）…………同上

時報

◎宮廷

●貞宮殿下の薨去　今上天皇の第十皇女貞宮多喜子內親王殿下には、昨年十二月二十日頃より、御與腐發生の爲、御發熱あせられ、同廿九日頃には、多少御輕快の御模樣なりしを以て、去る九日相州酒匂なる松濤園へ御轉地御養生あらせられしに、其の後又々御發熱、御腦膜炎症に罹らせ給ひ、遂に御療養相叶はせられず、十一日御薨去被遊たるを以て、十七日を以て豐島が岡御陵へ葬り奉りたり。

◎學事

●横濱女子技藝學校創立慈善會　横濱市に一技藝女學校を創立せんとするの計畫あるは、既に前號にも報じ置きたるが、其計畫は着々步を進め、去る廿日頃横濱會館にて基金募集慈善會を開きたる由。

●新潟縣の女子師範學校　新潟縣にては、小學教員の需要多くして供給之に伴はざるが爲に、昨年八月、臨時縣會にて既設校の外に高田に男子校、長岡に女子部を設置するの議に附したるが、地方の爭ひとなり、裁を主務省に乞ひたる結果、前議の如くになりたる上　長岡に新設すべきものは獨立の女子師範學校となし、百二十名の生徒を養成するに決したり。これは三十三年度より、現在新潟なる女子部を移轉して開校する由、其新設女子師範學校の爲に要する資本金は十万圓なりといふ。なほ又此女子校には、追々高等女學校を併置する筈なりといふ。

◎人事

◎兄妹二人孝悌を以て賞せらる　賞勳局に於ては昨三十一年十二月十三日左の孝子兄妹に特例金圓を下賜せられたる事は、前號紙上にも略記したれども、今其賞狀寫を得たれば、左に再記す。

三重縣伊勢國阿拜郡槇木村　駒山　多市

資性温良幼より父母に孝事し父中風を患へ加ふるに瘋癲病にして家事を見る能はず初め父商業を營みて折閱し盡て長兄病に罹て死し生計頗に困窮に至るや妹すゑと共に交々他家に傭はれ若くは行商と爲り其所得を以て湯藥甘旨を進め夙夜看護に誠を盡す適々人あり結婚を勸るも孝養の或は衰へんことを恐れて肯はす一意承歡二十餘年一日の如く父歿するの後母亦同症に罹り奉養扶掖至らざる所なきも幾もなく死亡せり後妻を娶て勵精業に服し一家輯睦郷閭咸な其至行を稱す詢に奇特とす依て爲其賞金三十圓下候事

明治三十一年十二月十三日

賞勳局總裁正三位勳一等　子爵大給恒

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

三重縣伊賀國阿山郡柘植村駒田多市妹　駒田　すゑ

資性温順幼より父母に孝事し父中風を患へ加ふるに母病癩にして家事を見る能はず初め父商業を營て折閲し尋で長兄病に罹て死し生計頓に困窮に至るや幼弱の身を以て次兄多市と共に交々他家に傭はれ其所得を以て湯藥甘旨を進め夙夜看護に誠を盡す妙齢に及びて人の婚嫁を勸むるものあるも孝養を缺くを恐れて肯はず一意奉養二十餘年一日の如し父歿するの後母亦同症に罹り孝養扶掖到らざる所なきも幾もなく死亡せり爾來兄を助けて紡績業に服し且つ姉の家亦貧其子女を迎へて之を撫育し友愛の道を竭す等洵に奇特とす依て爲其賞金二十圓下賜候事

明治三十一年十二月十四日　賞勲局總裁正二位勲一等　子爵大給恒

因みに云く、多市は本年四十二歳三ヶ月、妹すゑは同二十七年なりといふ。

●兵庫縣の貞婦孝女受賞　兵庫縣廳には四日の御用始に當り管下の篤行者を褒賞する慣例ある由にて今年の御用始めにも貞婦藤井コマ孝女小倉カメ同アイを旌表する左の如くなりき

兵庫縣多可郡中村の内牧野村町平民藤井清次妻　こ　ま（萬延元年七月生）

天性温良恭謙にして去る二十一年十一月清次に嫁したるが二十三年一月より其夫難治の症に罹りしを看護慰撫至らざるなく家は赤貧にして僅に一畝九步の畑地あるを其傍自ら耕作して生計の道を立て嘗て納租の期日を過たず十年十日の如く貞操の道を盡し居れるを奇特とし大森知事より賞狀に金一圓を添へて下賜せり

同縣宍粟郡山崎町之内山崎町九十一番屋敷平民小倉長次郎　二女　か　め（明治十四年三月生）　三女　あ　い（同　十六年十月生）

右二人は父長次郎嘗て商業上の失敗によりて家産を蕩盡せし上明治二十七年六月より罹つた水腫病に罹り父は常に外出して生計の道を計り居れるを以て其看護は全く右二人に委任し二人の娘は年端の行かざるにも係らず藥を進め病苦を慰め看護に力を盡し餘暇には賃仕事をなして家計を助け昨年九月同死亡の折迄も一日の如く孝養を盡せしを奇特とし同じく賞狀を下賜す

●美事一束　貞女の心　北海道根室○町邊濱縣菜の妻ゑき（二十三）（根室毎日新聞一月五日）●感心の婦人　高知縣安藝郡吉良川村堺内藤次の妻鶴代（二十八）が近處の孤獨の老婆石濱ウタ（七十八）の不幸を哀み、我家も生計困難なるにも拘らず、毎日の食事及び、衣服を與へたる事（土陽新聞一月十日）●貞婦　徳島縣阿波郡森山村大字山路村四十七番屋敷平民松家勢太郎の實母おかやが夫を亡ひてより遺孤を育し、八十五才の姑に孝養を盡くす事（千代田新聞一月八日）▲病婦良夫を扶けて家業を勵む　福井縣武生町蛭子區平民菓子商加藤八平の妻ナカ（二十六）夫の病を看護して家政を整ふる事（若越新聞一月十日）●孝貞の賤婦　神奈川縣三浦郡浦郷村農田中六右衛門妻同氏（五十六）夫の病氣の看護をなし、貧家を齊ふる事（萬朝報一月七日）

◎會合

●神戸婦人會雜事　神戸婦人會は曩に本幹事を改選したりしが其氏名は、

新任　坪野てい子　池田てる子　建野きく子　横河えい子　莊ちか子　塚本不二子

留任　小曾根しげ子　岩崎むめ子　渡邊たつ子　牛場みち子　類川ちか子

の諸氏にして創立以來の會員中他地方在住にして功勞あるものは會長大森夫人より永久名簿に記入したき旨照會書を發したりしが、尙ほ今十日午後一時より山手俱樂部に於て幹事會を開き右の諸件を議する由なり。（一）幹事中より庶務掛を設くる件（二）新年宴會の件（三）規則第十四條中毎月第三日曜とあるを第三土曜日に　同第十五條を本會役員は毎月十日會場へ集會し諸般の協議をなすと訂正する件、同第十八條を新設し會員に記章を交付する件（神戸又新日報）

●小樽婦人屆聚會　にては一月十日同區入船町量德寺にて本年の初會を開きたり。

◎雜事

●○○○○○○○○○○○○○○○　津田梅子氏の消息　去年米國デンバー市に開きたる萬國婦人教育大會に出席せし同人は閉會後同行者渡邊筆子と共に米國各州を漫遊して其普女子教育の實況を視察し居たりしが其後渡邊は病院に入院し逐ひて健康を傷ひ遂に十一月下旬を以て歸朝の途に就くこととなりしが津田は單獨にて英國に航し目下倫敦滯留中なるが過般在英加藤公使より同人の消息に就きて當本外相の許へ書越し來りたる書信なり。いふを聞くに津田は十一月初旬英國リヴァープールに着し直ぐ領事館記官の出迎に逢ひて同月十二日倫敦に入れり然るに同人は餘り久しく海外に在りては本國に於ける教授の職務を盡すこと能はざるを氣遣ひて公使に協議せしに公使は同人が熱々當國に滯泉して充分なる取調を遂げざるは本意にもあらざるべく殊に當國婦人社會の有力者は何れも同人の來遊を待ち設け居たることなれば其好意に任じて續々學事の取調に從事するも却て好都合なるべしとの旨を傳へ又英國青年院院長ピッカルスムッツ未亡人よりも不日ケンブリッヂ及びチェルテナムに赴き當分中は兩所にて諸種の取調視察に從事し來年はオックスフォードに至り同地の女學校に寄宿して入學し親しく女子教育の實況を視察し三月下旬同校の學期終了まで同地に滯在することを好ければとの注意を與へたれば同人もその意に從ひて本年六月頃までは是非共英國に滯在する事に決心したりと云ふ因に記す同人が昨年九月二十九日附を以て同人及び渡邊に交附したる英國女子教育事業視察の辭令は十一月十八日を以て受領し渡邊の辭令は其儘送屆に及ぶべき旨加藤公使より申添來れりと（萬朝報一月十三日）

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

●文部省撿定濟高等小學校教料用書
●日本銀行副支配人藤尾錄郎君著
●田口卯吉君序

實地應用 **家計簿記法**

菊判 定價金二拾錢 全一冊 郵送料金四錢

此書は唯朝夕數字をたゞ記入せば一家の出納細大漏さず之を明にするを得せしむるものにして公私の學校生徒は固より官吏會社員農工商に論なく凡そ一家を經營する者は必ず講讀すべき必要書なり

●文部省撿定濟高等小學校教料用書
●日本銀行副支配人藤尾錄郎君著

同 例題

四六判 定價金拾錢 全一冊 郵送料金貳錢

右は前書家計簿記法に據り記入法を習學せんとする者の爲に例題を設けて其標準を示したるものなり

日記帳 價金七錢 郵稅金貳錢

元帳 價金七錢 郵稅金貳錢

賄費仕拂帳 價金拾貳錢 郵稅金四錢

但右三帳簿を一と纏めになす時は郵稅六錢

右は前記家計簿記法を實用なされ候方は勿論又同法例題により簿記法を習學なされ候女學生諸君其他一般に簿記を習熟せられんとする方々の便利の爲めに調製せしものにして此三帳簿あれば一家の經濟を容易に整理し得べく若くは容易に家計簿記法を習熟することを得べき極めて重寶なる帳簿なり

東京市京橋區彌左衛門町七番地
(電話番號新橋八十七番)

發行所 合名會社 **經濟雜誌社**

社頭懷古

來明治三十二年四月宮崎神宮御大祭ニ付テ諸大家之和歌申請ケ奉納仕度御座候間左ノ題ニテ御詠進御願申上度尤御詠進之儀ハ左ノ箇所ニ於テ取集候筈ニ御座候間來二月末日迄ニ御詠出之御詠被下候上其最寄之取集所へ御送り被下度候也

明治三十一年十二月

在宮崎 正七位 横尾炳

全 多賀武治

御詠進 **取集所**

東京市京橋區木挽町一町目七番地 忍井哥
京都市下京區竹屋町上松帶町 大井象
日向國宮崎町大字上別府 橋尾炳
同町大字上別府 多賀武治

救濟新報

社會問題の解釋を以て任じ、縱橫の筆、雄渾の文、盛んに社會救濟策を論じ社會研究に關する必要の事項を載す此種の發行物としては實に吾文界の破天荒たり

每月二回發行 定價一部貳錢五厘 廣告料一行一回十五錢

社說 正々堂々救濟の方策を論じ人をして一讀大に發明する所あらしむ
論說 社會に關する內外名士の卓論明說を網羅す
演說 諸名士に請ふて演說を筆記し人をして一讀自ら之を聽くの感あらしむ
社會 社會學上の事項並に社會問題に關する有要の事項を掲ぐ
教育 教育に關する萬般の事項を掲げ殊に兒童研究に一項を設け斯學に志ある者の參考に資す
訪問 諸名士を往訪して聽き得たる所說を掲げ人をして自ら之と接談するの快あらしむ
家庭 家政並に家庭教育に關する事實平易にして趣味ある記事を掲く
史傳 社會改良家、慈善家及び社會公益に盡瘁せし名士の傳記を掲ぐ
文苑 和歌、新體詩、漢詩、俳句等の珠玉を羅ぬるが如し
雜錄 簡易にして興味あり理想高き記事多し
小說 優美にして品位高き短篇小說を掲げ言外深く樂む所あらしむ
英文 外國名士の寄書多く見るべき論說記事あり
其他 孤兒院の記事を掲げ院月誌は同院の實況を報じ寄書は愛讀者の名文多く影寫報には得て有志家の參觀に供す

東京市神田區仲猿樂町十七番地
東京孤兒院東京支部

發行所 **救濟新報社**

大賣捌所 **商業部**

明治廿九年三月十五日遞信省認可

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

明治廿九年三月十五日遞信省認可